らき☆すた　in　戦国時代　第１章

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らき☆すた　ｉｎ　戦国時代　第１章

【Ｎコード】
Ｎ９０８２Ｎ

【作者名】
ｓｉｂｕｇａｋｉ

【あらすじ】
らきすたメンバーがもし戦国時代に居たらと言う妄想の元書いた小説です
その第１章です

あらすじ（前書き）

これは作者がこのサイトに投稿する前に書いてた試作小説です
興味があったらご覧下さい

あらすじ

らき☆すた　ｉｎ　戦国時代

あらすじ

時は戦国・・・豊臣秀吉が天下を統一してから少しの時が経った時

人々の間に奇妙な噂があった

「青い髪の子・・・近づく者に災いをもたらす」

それを聞いた人々は青い髪の子を恐れるようになったそして、また

この時代に一人の青い髪の少女が産声を上げた

登場人物

泉　こなた

本編の主人公

青い髪をした少女、１７歳になる

非常にいたずら好きで、事あるごとに武将や家老にいたずらをする

事は日常茶飯事である

しかし、その度にかがみに怒られているが本人はそれも楽しんでいる

戦国で強国と言われた泉家の子であったが生まれて間も無く泉家は

没落してしまい、こなたは配下の武将の手により山奥に捨てられて

しまう

しかし、そこで少年時代の前田慶次に拾われて前田家の養女として育てられた
慶次とは拾われたが故か実の兄のように接している
（慶次が原因でこなたがいたずら好きになった）

出生の多くは謎に包まれているが、どれも人間ばなれした身体能力を持っている

柊　かがみ

前田家に仕える武将
女性の身でありながら並ぶ者無しとされる程の剣技を持つ
前田家の中でもそれなりの地位に座っており妹のつかさを側小姓として側に置いている

非常に真面目な性格である為、度々こなたが行う悪戯に鉄拳制裁を加えるのは専ら彼女の役目である

感情の起伏が激しい性格であるが、戦場に立てば冷静に状況を判断し、一騎当千の働きをする

その為、敵味方の間から恐れられている

一見怖いもの無しの様に見えるが、実はオバケが苦手

柊　つかさ

前田家に仕える側小姓、かがみの妹

戦いが苦手で姉のかがみの身の回りの世話をしている

側小姓ではあるのだがそれ程周りに気が配れると言う訳でもなく少々ドジな所がある

年が近いのもあるのかこなたと仲が良く暇な時は一緒に居る時が多い

料理が美味く、彼女が作った際はどの武将も毒見せずにがっついてしまう

優しい性格である故か、姉と違い他の武将からの人気が高い

高良　みゆき

前田家に仕える武将

才色兼備、頭脳明晰と絵に描いたような美人ではあるが、かなりの天然である

戦場では部隊に的確な指示を送り、多くの戦いに勝利をもたらすと言われているが、私生活では天然であるが故かドジな面も多々見られる

こなたからは「歩く萌え要素」といわれている

（この時代でも萌えはあるらしい）

日下部　みさお

前田家に仕える忍者

忍の腕は超一流なのだが、オツムが弱い
かがみとは仲が良く、ちょくちょく彼女の部屋に天井から入って来ては怒られてる
こなたとはかがみを巡ってライバル同士であり、顔をあわせる度に喧嘩を始める
医者であるあやのとは親友同士でありかがみに怒られると良く彼女の元へ泣きよって行く
峰岸　あやの
前田家に仕える医者
内科から外科、はたまた針治療までこなす万能医者
武将達からは仏の峰岸と呼ばれている
普段は笑顔をたやさない聖女の様な女性であるが、怒らせると途端に悪鬼となる
みさおとは昔馴染みな故か仲が良い

第1章　青い髪の少女　第1話　戦後の世（前書き）

いきなりぶっ飛んだ話になってます

第1章　青い髪の少女　第1話　戦後の世

第1章　青い髪の少女
第1話　戦後の世

時は戦国時代も終った時

世はかの太閤「豊臣秀吉」が天下を統一して戦も無くなり人々は戦の無い世を生きていた

武将達はいつでも戦いが起きても良いように切磋琢磨していた

物語は、その中の一つの国から始まる

＊＊＊

「ハッハッ！」

朝早くからかがみが外で素振りを行っていた
紫色の長い髪が振りの動きに合わせて揺れている
汗が朝日に照らされて輝いている

朝早くに起きて素振りをするのは、かがみの日課でもあった

・・・そこへ

「「「「「かがみ殿〜〜〜」」」」」
「な、なに？」
大勢の武将達が突然かがみの前に現れた
突然の出来事に一瞬驚いたが、すぐに落ち着き一呼吸を置いて聞いた
「どうしたんですか？皆して・・・」
「聞いて下され！かがみ殿〜〜」
武将の一人が半べそをかいて言った
「今朝起きたら拙者の髷が解かれていたのでござるよ〜」
「拙者は顔に髭の落書きをされてしまったのですよ〜」
「ワシにいたっては大事な褌に落書きをされて・・・もう表を歩いては行けぬでござる〜」
「・・・・・」
どの武将もその場に座り込み泣き出してしまった
その姿を見てかがみが呆れたのか深い溜息を漏らす
（は〜、またあいつか・・・）
かがみはそんな事をしでかす輩が浮んだ
素振り用の竹刀を軽く一振りして地面に置いて、額の汗を拭ってから泣いている武将達を見た
「心配しないで下さい、犯人は私からきっちりお灸をすえておいてあげますから」
「「「「「お願いします！かがみ殿〜〜〜」」」」」

その言葉を聞いて武将達は正に号泣の域に達していた

「全く・・・誰に似たんだか・・・こなたの奴」

ふと、かがみは今回の悪戯の張本人だと思われる人物の名を呟いた

「あ、お姉ちゃん！」

元気そうな少女が駆け寄ってきた

「つかさ！いつも言ってるでしょう！ここではお姉ちゃんって呼ぶなって」

「えへへ、そうだったね。御免ねおねえ・・・かがみ様」

「分かればよい」

つかさは頬を染めて顔を擦っていた

それを見てかがみはつかさの頭を撫でる

「ところでつかさ、あなたこなたを見なかった？」

「こなちゃん？・・・こなちゃんならさっきおやつのおはぎを取りに来てそれから何処かへ行ったよ」

「何処に行ったか分かる？」

つかさは少し考えた

そして口を開く

「そういえばゆきちゃんの所に行くって言ってたよ」

「みゆきの所ね・・・分かったわ」

かがみはそう聞くと早速その場を後にした

＊＊＊

「みゆき、居る？」

かがみは部屋のふすまを開けた

「あら、かがみさん。どうしたのですか？」

部屋の主と思われる少女はニッコリと笑いかけた

「あ、御免・・・勉強中だった？」

気を悪くしたかと思い咄嗟に謝るかがみ

それを見てみゆきはクスリと笑った

「いえ、大丈夫ですよ。それよりどうしたのですか？そんなに慌てて」

「ああ、うん。実はまたこなたが皆に悪戯したらしいのよ」

「まぁ、そうなんですか・・・」

みゆきは頬に手を当ててフゥと息を吐いた

「それでさっきつかさに聞いたらみゆきの所に行ったって聞いたんだけど・・・」

かがみは部屋を見渡したが、部屋にはみゆき以外見当たらなかった

「泉さんでしたら、先ほどいらしてましたよ・・・ですが、またす

ぐに出て行きましたね」
「それで、何処に行ったか分かる？」
みゆきは聞かれ、少し考え込んだ
「確か・・・日下部さんの所に行くと言ってましたねぇ」
「日下部ね・・・分かったわ」
かがみは頷き、みゆきの部屋を後にした

＊＊＊

「日下部！」
かがみが向かった先は忍者屋敷であった
「お、何だ柊じゃねぇか？」
黒い忍者服を着た短髪の少女が手を振って寄って来た
「あんたねぇ、もう少し忍者の頭としてしっかりしなさいよ」
「え～、面倒臭いからヤダよ～」
みさおはむくれて言った
それを見てかがみは額に手を押える
「は～、これが前田家忍者の頭領とはねぇ・・・全く」
「何だよぉ・・・酷いぞ、柊ぃ！」
両の頬をめ一杯膨らませてみさおは怒って見せた

それに対しかがみは若干投げやりな顔をした

「ところで日下部、あんたの所にこなた来なかった？」

「ああ、あのチビッコかぁ・・・あいつ・・・」

みさおはこなたとの事を思い出し不機嫌な顔をした

「な・・・何かあったの？」

「聞いてくれよぉ柊ぃ・・・あいつよぉ・・・」

みさおが涙目で訴えた

「ま、まさかあんたも・・・」

「柊は私にもんなのに『違う、かがみは私の嫁だ！』て言ってたんだぜぇ！」

「・・・は？」

かがみは目を細めた

「だから、あのチビッコは柊を自分の嫁だって大声で・・・」

「もういい！」

かがみは手を翳して制した

「で、そのこなたが今何処に居るか？・・・あんた分かる？」

「んあ？あのチビッコの事だからきっと今頃いつもの所に居るんじゃねぇの？」

「いつもの・・・」

みさおにそう言われ、かがみは咄嗟にある場所が浮んだ

そこは常にこなたが悪戯をした後に必ず向かう場所である

「はぁ・・・あんがと、日下部」

「あ～ん、待ってくれよぉ柊ぃ～、お前は私の嫁だよな～」

「知らん！」

みさおの言葉を切り捨てかがみは忍者屋敷を後にした

「うわ～ん、柊が冷て～」

忍者屋敷を出た後、みさおの泣き声が響いた

それを聞いて、かがみは大きな溜息をついた

「全く・・・あいつは・・・」

かがみの額に怒りマークが浮んだ

＊＊＊

屋根の上、少女はそこに座っておはぎを齧っていた

頬に餡をつけながら美味そうにおはぎを食べている

そして、下で慌てふためいてる武将達を見てほくそ笑んでいた

「ムフフ～、やっぱ悪戯した後に食べるおはぎは最高だね～」

少女は足をブラブラさせて満足そうに言っていた

青い長髪にアホ毛が出ており、右目の下には1個の泣きホクロが出来ていた

彼女こそ、毎度悪戯を起こす張本人「泉　こなた」その人である

「う～～ん、やっぱ毎朝こうやって悪戯をした後の成果を見るのが何より楽しいよねぇ～」
『毎朝やられても困るのよ』

ゴン！

突如、かがみの鉄拳がこなたの頭に叩きつけられた

「ウギュッ！」

鶏の首を絞めた時のような声を挙げてこなたは屋根につっぷした

「全く・・・あんたは毎度毎度悪戯して・・・それでも前田家の武将？」
「う～、酷いよ～かがみ～ん・・・」

こなたは頭を抑え、涙目で訴えた

「あんたが悪いんだろうが！後かがみん言うな！」

呆れ口調でかがみは言った

「さ、さっさと降りて皆さんに謝りに行くよ」
「え～～～、やだ～～～」

こなたがその場に座り込んで駄々をこねる

「じゃぁ今此処で鉄拳１００発を食らう方が良いのかなぁ？」

と言ってかがみが腕を鳴らし始めた

「う～～、分かったよ～、かがみんは凶暴だな～」
「五月蝿い！」
少し顔を染めながらも渋るこなたを引っ張って屋根を降りた

＊＊＊

こなたはかがみに連れられて城の大広間に座らされていた勿論正座で
「ねぇ、かがみん」
「何よ？」
「足痺れたから崩して良い？」
「駄目に決まってるだろうが！」
即答で却下だった
「全く・・・またお前の仕業か？こなた」
こなた達の前に髭を蓄えた険しい顔の男性が座っていた
彼は前田家頭首「前田　利家」である
「いい加減にしろ！貴様の悪戯のせいで武将達が皆迷惑しているのだぞ！」
「ぶ～、すんませ～ん・・・」
こなたは謝罪の意を示したが顔を膨らませていて、明らかに不満そうな顔をしていた
「あんたねぇ、少しは自分の悪さを認めなさいよ！」

「そうで御座る！」
「毎度毎度悪戯されてこっちはもう寝付けないので御座るよ」
「拙者の大事な褌が・・・もう腹を切るしか無いで御座るぅぅ」
周りからの集中攻撃を受け、こなたは只でさえ小さいのが更に小さくなってしまった
「まぁまぁ、落ち着けよ皆の衆」
そこへ異様な服装をした青年が現れた
「慶次さん」
「「「慶次殿」」」
「慶次兄さん！」
一同が青年の名を呼んだ
彼は前田家の武将で天下一の傾き者「前田　慶次」その人である
慶次は名前を呼ばれた皆に向かってとろける様な笑みを浮かべた
「慶次・・・何の用だ」
反対に利家は不満が顔に表れていた
それを見て慶次が苦笑いを浮かべる
「まぁまぁ、おじきもそこら辺にしてこれでも飲んで落ち着けよ」
と言って慶次は利家に1杯の茶を差し出した
「む、貴様にしては気が利くな」

利家は慶次から毟り取るように茶を取った

「貴様もこれを起に前田家に尽くせよ」

そして、茶を一気に煽る

茶の淡い苦味が舌を通り抜けて喉に流れる・・・

・・・筈だった

・・・んが

「！！！！！！！！！！」

途端に利家の顔が真っ赤になる

目が真っ赤に充血し、鼻から物凄い勢いで空気が流れ出していき、

口がへの字に曲がる

「が、がらいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

大声で叫ぶ

喉を押えて必死に走り回る

舌が限界まで伸び、ヒーヒー言いながらのたうち回っていた

「「「殿！」」」

「利家様！」

かがみと武将達が驚き駆け寄った

利家は必死に何かを要求しようとしていたが

「い・・・いうううう・・・いうおぐでええ」

「「「「？？？？」」」」

何を言っているのかさっぱりであった

その横では

「ぎゃはははは！引っかかってやんのおじき・・・・ぶはははは

は『がらいいいいい』だってよはははははは」

慶次は腹を押えて笑っていた

口をこれでもかと言う程開き、その口から大きな声で笑っていた

「け、慶次さん！これは一体・・・」

かがみが不安がった顔で聞いた

「ははは・・・心配するなかがみ、死にゃしないよ。さっきの茶の

中に『唐辛子』をたっぷり入れたのさ」

「唐辛子？」

「南蛮の渡来品さ」

慶次は裾から唐辛子を1本取り出した

それをかがみに渡す

「これが・・・唐辛子なる物なのですか？」

「試しに食ってみろよ」

「え？」

かがみは恐る恐る唐辛子を少し齧ってみた
途端に口一杯に激しい痛みと今まで感じた事が無い味覚が襲って来た
「！！！！！！！！・・・な、何ですか！こ、これは・・・」
涙目になり、必死に口を押えてかがみは聞いた
それを見て更に笑いそうになるのを慶次は堪えながら言った
「それはな、「辛い」って言うんだよ、寒い時なんかにゃ持って来いだぜ」
「じょ、冗談じゃありまへん！な・・なんほかしへくばはい」
辛さを知らなかったのか、かがみの言語も可笑しくなっていた
「ぷ～～、かがみん何その喋り方・・・凄い面白いよ！」
こなたはそんなかがみを見て声を押し殺して笑っていた
それを見てかがみの顔が即座に真っ赤になった
「ご～～～～～な～～～～～～～だ～～～～～～」
顔も唇も真っ赤になったかがみが怒りの表情を露にしてこなたに向かって来た
「慶次殿！」
「悪戯にも程がありますぞ！」
「それでも前田家の武将であるか！」
配下の武将達も怒りを露にして寄って来た

「うおっと・・・こりゃ不味いな、じゃぁな！」
「バイニ～～～」
こなたと慶次は疾風の如く部屋を抜け出した
「待ちなさい！二人共おおおおおおおお」
「「「逃がしませぬぞおおおおおおおおおおおお」」」
それを追う様に武将達も部屋を後にする
「うおおおおい、わじを・・・わじをどうにがじでぐでえええ」
利家が未だ喉の辛みに苦しんでいた
そこへ、
「失礼致します」
戸を開け、医者の服装をした女性がやってきた
蜜柑色の長い髪をした落ち着いた顔の女性である
彼女はこの城の主治医の「峰岸　あやの」である
「おお、あやの殿では御座らんか」
武将達をさっさとまいた慶次が部屋に戻りあやのに近づいた
「慶次様、これは一体どうしたのですか？利家様がなにやらもがき苦しんでおるのですが・・・」
あやのは苦しんでいる利家を見て言った

主治医でもまだ卵である為分からない症状を見て対応に困っている様である

「実はな、利家様の茶に猛毒が仕込まれて居ったのだ。このままでは利家様は毒死なさってしまう」

「な、何ですって！急いで治療しなければ」

「心配するな、あやの殿！この猛毒はこの唐辛子を煎じて飲ませれば治るのだ」

と言って慶次は持っていた唐辛子を全てあやのに渡した

「あ、あじゃごどどおおおおお！ぞでばじがうううううごうごぐでばばいごおおおおおお」

利家が必死に否定するが、相変わらず何を言っているのか分からない言語であった

「あ、あのぉ・・・利家様が何か訴えておる様ですが・・・」

「む、いかん・・・毒が回り始めたようだ、あやの殿！一刻の猶予も御座らん！早く唐辛子を全部飲ませるんだ！」

「分かりました！」

あやのはすり鉢を取り出し、慶次から渡された唐辛子を全て粉状にした

「さ、利家様！早くこれを飲んで下さい」

あやのが粉末状にした唐辛子を利家に向ける

だが、利家は涙を流しながら必死に首を横に振って否定した

「利家様！急いで下さい。このままでは利家様の御命が・・・」

そう言っているあやのの目に涙が浮んでいた

「仕方が無い、あやの殿！拙者もご助力致そう」

慶次はそう言うと利家の後ろに回りこみ、両手で利家の口をがばぁと開いた

「ふがふがふがががあああああああ」

「さ、あやの殿！早く唐辛子を！」

「ハイ！利家様、すぐにお救いいたします」

あやのが大きく開かれた口に向かって粉末状の唐辛子を全て放り込んだ

「ふぎゃあああああああああああ」

部屋一面に利家の悲鳴が響き渡る

＊＊＊

「こらぁ！待ちなさい、こなたあああああ！」

かがみは必死になってこなたを追いかけていた

朝から走りまくりだったが為かかがみの顔に疲労の色が浮んでいた

「おやぁ、どったの？かがみん。もうばてたの？」

追われているこなたは余裕その物でもあった

額には汗一つかいては居らず、それどころかかがみが追ってくるのを楽しんでいるようでもあった

「な、何であんたはそんなに余裕なのよおおお！」

「コレ位は朝飯前だよかがみん」

息切れ寸前のかがみを他所にこなたは解説をしながら走っていた

途端にこなたのスピードが落ちる

「お、遂にばてたか？」

好機と思いかがみはラストスパートをかける

ダンダン二人の距離が縮む

「あああああ、掴まっちゃうよおおおお」

「覚悟しなさい！捕まえたらたっぷりお説教してあげるからね」

かがみが不気味な笑みを浮かべる

もう二人の距離は手を伸ばせば届く範囲にまでなった

かがみはこなたに向かって手を伸ばす

・・・その時だった

「え？」

突如、こなたが脱兎の如く急加速したのである

「おま、まだそんな余力があったのか？」

「へへへん、そう簡単には掴まりませんよぉ」

そのまま一飛びで屋根を飛び越え城の外に逃げてしまった

「こ・・・こなたあああああああああ！」

完全に逃げられてしまい、かがみはその場で膝をつき思い切り叫んだ

＊＊＊

武将達の追っかけを逃げ切ったこなたと慶次は近くの原っぱに寝転んでいた

「いやぁ、危なかった～～」

「流石かがみだな。危うくおじきの拳骨が飛ぶとこだったぞ」

それを聞きこなたが震えていた

「ひえ～、おっかない。利家おじさんの拳骨は痛いからね」

「全くだ」

慶次がそれに納得した

二人はまた空を見上げた

空は眩しい太陽がさんさんと輝いており、その下を雲が通り過ぎていくのを二人は見ていた

「それにしても・・・平和だねぇ・・・何かのんびり出来ちゃうよ」

「俺は退屈だぜ、何処かで戦でも起きないもんかねぇ」

慶次は退屈なのか大きなアクビをした

「本当に退屈だねぇ・・・」

こなたもそれにつられて大きなアクビをした
暫く二人は黙っていた

・・・
・・
・

「そう言えば・・・もうあれから17年になるんだな」
「ふぇ、何が？」
こなたは素っ頓狂な顔で聞いた
「何だ忘れたのか？お前が家に来たのが丁度17年前だろう」
慶次はあの時を懐かしむように言った

＊＊＊

17年前、慶次は山奥で熊を仕留めて意気揚々と帰っていた
「へへ、この熊の肝を父上に食べさせればきっと元気になるぞ」
倒した熊を紐で括り付けてそれを引きずりながら慶次は山道を降りていた
体中に負った擦り傷が今回の熊との戦いの壮絶さを物語っていた
・・・その時
「ん、今何か聞こえたな・・・」

付近から何かが聞こえてきた

「何だろう、赤ん坊の声か？」

慶次は付近を見回した

だが、赤ん坊の声が聞こえるだけで、姿は見えなかった

慶次は辺りを必死に探し回った

「何処だ、何処に居るんだ」

こんな山奥で赤ん坊が一人で居るのは危険な事だ

下手な事をすれば山の熊に殺されてしまう

まして、こんな大声で泣いていたら尚更すぐに見つかってしまうだろう

慶次は内心焦り出した

「畜生、早く見つけねぇと・・・・ん？」

ふと、慶次の目にある物が止まった

木の裏側から白い布が見えたのだ

「もしかして・・・・」

慶次は布のある方へ駆け寄った

「いた！」

そこには、青い髪の赤ん坊が大声で泣いていた

慶次はその赤ん坊を抱きかかえた

すると、赤ん坊は更に大声で泣き出した

「おお、お前元気だなぁ・・・腹減ってるのか？すぐに飯を食わしてやるからな」

慶次は赤ん坊を熊の上に乗せ再び熊を引きずった

＊＊＊

「父上！ただ今帰りましたぞ」

慶次は赤ん坊と熊を連れて無事に城に帰ってきた

「け、慶次殿！その熊は一体・・・」

武将の一人が死んだく熊を見て驚いていた

「へへ、熊の肝は万病に効くと言うからな、父上には一刻も早く元気になって貰いたいしな」

慶次は鼻を摩っていた

「け、慶次殿・・・」

武将が目に涙を浮かべていた

「さ、待ってろよ。すぐに肝を出すからな！残りは皆で熊鍋にして食おうぜ」

慶次が小太刀を取り出して熊に向い背中を向けた

「け、慶次！」

そこへ、真新しい声が聞こえ振り返った
そこには、慶次の父「前田　利久」であった

「お、お前・・・その背中の傷は・・・まさか」

慶次の背中には熊の爪痕と思えるような傷がついていた
しかし、慶次はその怪我を痛がりはしなかった

「へへ、銃が上手く使えなかったから良いのを一発貰ってしまったんですよ、なぁにこんなのはかすり傷みたいな物です。すぐに治りますよ」

慶次は笑いながら背中を指した
そして、再び熊に行こうとした時、慶次はある事を思い出した

「そうだ、父上！森でこの子を拾ったんです」

慶次は先程拾った子供を見せた
それを見た途端、女柱と武将達の顔が凍りついた

「あ・・・青い髪の子・・・悪魔だ！」
「ひいいいいいいいいいい！鬼の子よおおおおおお」
「な、何でこんな子を拾って来たんだ慶次殿おおおおおお」

途端に怯えだす一同

「何だよ、何怯えてるんだよ！」

慶次は訳が分からず首を傾げた

「慶次殿、そんな子は早く捨ててきて下さいまし」

「はぁ？何言ってるんだよ、あんなとこに置いてたら熊に食われちまうじゃないか！」

慶次が信じられないと言いたげな顔で言った

「慶次殿、青い髪の子は鬼の子と言われてるのです。近づく者には災いが降り注ぐと言われているのですぞ」

「こいつの何処が鬼の子なんだよ！」

と言って慶次は赤ん坊の顔を見せた

赤ん坊は見えない目を一杯に開いて目の前の武将達を見ていた

その姿からは、とても鬼の子とは思えなかった

そう・・・思いたかった

「し・・・しかし・・・」

「もう良い・・・」

利久が止めた

咳をしながら利久がゆっくりと慶次と赤ん坊の元へ歩み寄る

「ふ～む、何と吸い込まれそうな綺麗な瞳をした子よ・・・」

利久が人差し指をそっと赤ん坊に近づけると、赤ん坊は小さな腕で指を掴んだ

まだ小さいのか無い力を必死にして掴んでいたのが利久には分かった

「うむ、やはりこの子は我が家に置くとしよう」
「「「殿！」」」
利久の発言に一同が信じられないと言いたげな口調で言った
「慶次、この子の名前は分かるか？」
「そういえばさっき赤ん坊からこの紙切れが出てきたのです」
慶次は手に持っていた一枚の紙を手渡す
「ふ～む、”泉　こなた”・・・か」
赤ん坊の名前を聞いて一同が戦慄を覚えた
「と、殿！泉家と言えば、織田家と並ぶと言われる戦国最強の国家だった筈です・・・今はもうありませんが」
「もう無い国ならば良いでは無いか、それより今はこの子が健やかに育てばそれで良いのだよ」
利久は赤ん坊に向かってにっこりと微笑んだ
赤ん坊はそれを見てニンマリと笑った
かくして、泉　こなたは前田家に置かれるようになった
第1話　終
次回
「親友」

第2話　親友（前書き）

今回あのキャラが登場します

第2話　親友

第2話　親友

こなたが前田家に置かれてから5年の月日が流れた

その間も、こなたは大きな病気もせず健康そのものに育っていた

・・・は良かったのだが・・・

「こらあああああああ！またお前かあああああああああ」

顔に面白い落書きをされた武将が5歳のこなたを追いかけていた

「わ～、見つかっちゃった～」

左手に筆を持ったこなたが屋敷中を走り回っていた

武将もそれを追うが、彼女は5歳にしてまるで脱兎の如き速さを持っており、全く追いつけなかった

「ぜえ、ぜえ、な、何て速さなのだ・・・」

とうとう武将はその場に座り込んでしまった

少し、うな垂れた後、前を見ると・・・

「ねえ、おじさんもうばてたの？」

こなたが武将の目の前に来ていた

どうやら追いかける相手がへたり込んでしまったので見に来た様で

ある

「おじさんが追いかけてくれないと鬼ごっこにならないよぉ」
「な！鬼ごっこぉ？」

武将は今正に腰の力が抜ける思いがした
今まで悪戯を叱ろうと必死に追い掛け回していたのが本人にとっては遊戯であったのだから

「は・・はは・・・ははは・・・」

その場に座り込み、諦めた様に笑っていた
それを見てこなたは首を傾げていた

「何で笑ってるの？おじさん」

こなたには笑う理由が分からなかったようである
そこへ・・・

「おーーい、こなたぁ！いるか？」
「あ、慶次兄ちゃん」

１５歳になった慶次がこなたを呼んだ
それを見てこなたが即座に反応する

「飯炊きのおばちゃんからおはぎ貰ったぞ、食うか？」
「うわ～～い、おはぎだ～～」

こなたは小さな体を使って喜びを表した
それを見て慶次もニヤリと笑う

「あ、そういえば慶次兄ちゃん、あれどうしよう・・・」
こなたはその場に座り込んでいた武将を指差した
「あん、放っておけ、その内元に戻るさ」
「うん、わかった！」
慶次の言葉にこなたはいささかの疑いも持たず、そのまま鵜呑みにした
そして、慶次に連れられておはぎの待ってる場所に向かった
「どうだぁ、良い眺めだろう？」
慶次がこなたを連れてきたのは屋敷の城のてっぺんであった
「うん、凄い眺めだよ！」
「そうかそうか・・・喜んでくれて俺も嬉しいぞ！」
慶次とこなたは眺めの良い屋根の上でおはぎを頬張った
慶次は一口で1個平らげてしまったが、こなたはまだ小さいのか1個のおはぎを食べるのにかなりの時間を有していた
その間は、こなたの顔はとろけるような笑顔で満たされていた
「やっぱここのおばちゃんのおはぎは最高だなぁ」
「うん！とっても美味しいよ」
手についた餡を舌で舐め取るこなた
そんなこなたの頭を慶次は優しく撫でた

「け・・・慶次殿〜〜」
「あ、さっきのおじさんだ」
そこへ、顔を拭いてきた武将が慶次の元へ駆け寄る
「慶次殿！此処に降りましたか・・・」
「何だよ、五月蝿いなぁ・・・」
慶次がイヤイヤ振り向く
武将は額に汗を流しまくっていて、息も絶え絶えであった
「慶次殿からも言ってやって下さい！こなた殿の最近の悪戯と来たら・・・もうたまらんで御座る・・・」
武将は悔しそうに慶次に進言した
しかし、慶次はと言うと耳をほじくって面倒くさそうに聞いていた
「子供が悪戯をするのは当然の事でしょうが、それを大人が勝手に押さえ込んじまったらロクな大人にならんでしょう」
と言って慶次はほじくっていた指を外し、フッと息を当てて指についていた耳垢を払った
「な、何を言っているのです！その子は鬼の子なのですぞ！今のうちにしっかりとしつけておかなければ・・・」
「何だと・・・」
その言葉を聞いて慶次の顔つきが変わった
ゆらりと立ち上がり武将に近づく

「慶次兄ちゃん、どうしたの？」
こなたには全く訳が分からないのか首を傾げていた
「こなた、俺はちょっとこのおじさんと話しがあるから少しまってろよ」
「うん、わかった」
慶次は笑った
そして、振り返ると、後ろに居た武将の首根っこを引っ掴んで引きずっていった
「いだだだだ」と武将は声を挙げていたが、慶次は気にも留めずそのまま下へ行ってしまった
・・・そして
「バキャアアアアアアン」
轟音が響いた
と、言うよりも何かを殴ったような音であった
「おじさん・・・大丈夫かなぁ・・・」
こなたにはこの音が何なのか分かっていた
慶次の鉄拳である
以前にもこんなのがあった
同じように配下の武将がこなたを鬼の子と蔑んで呼んだ際に慶次がその武将を外に引きずっていき

・・・今の音である

「ちょっと、可愛そうかなぁ・・・」

こなたは足をブラブラさせながらそんな事を考えていた

そして、ふと思いつく

「そうだよね、元はといえば私のせいなんだし・・・」

こなたは立ち上がると、そそくさと屋根を降りた

＊＊＊

「うう・・・慶次殿の拳は相変わらず痛いで御座る」

先ほどの武将が殴られた箇所を押えて呻いていた

頬を殴られたのか、大きく膨れ上がっていた

「うう・・・全く、慶次殿は何故あの鬼の子にああも甘いのだ・・・

慶次殿は知らんのか？あの子が曰くつきの子だと・・・」

「おじさん」

「うわぁ！」

突然声がして振り返ると、そこにはこなたが居た

それに驚いて飛びのく武将であった

「はい、これ」

「こ・・・これは・・・」

こなたが両手で取り出したのは治療用の湿布と傷薬であった

「さっき慶次兄ちゃんに殴られたでしょ。これ良く効くから使ってね」

「こ・・・これを・・・拙者に・・・」

武将は明らかに動揺していた

「大丈夫だよ、ちゃんとお医者さんから貰ってきたから」

と言ってこなたはニッコリと笑った

それを見て、今までその武将の中にあった怒りやその他の感情が一気に吹き飛んだのを感じた

そして、武将は思わず・・・

「すまん！」

「へ？」

武将はその場に頭を床に叩きつけお辞儀した

いわゆる「土下座」である

こなたには、何故武将が謝るのか分からなかったので頭に？を浮かべていた

「う～ん、良く分かんないけど・・・」

こなたは土下座している武将の頭を小さな手で優しく撫でた

「な、何を・・・」

「慶次兄ちゃんが言ってたんだよ。ちゃんと謝れたらこうするんだって」

こなたは小さな体と小さな手で武将の頭を撫でていた
それに対し、武将は何故か涙が溢れていた
決して悔しいからでは無い

「こんな・・・こんな子を拙者は・・・鬼の子などと・・・すまぬ・・・すまぬ・・・」

武将は只ひたすら謝っていた
頭を仕切りに床に打ち付けており、その頭からはうっすらと血がにじみ出ていた

「はいはい、自虐ネタはもういいから、顔をあげなよ」

見るに見かねてこなたが武将を起こす
そして、袖から布を取り出し、武将に渡す

「そんな顔じゃみっとないよ、ここでちゃんと整えないと」

こなたから布を受け取ると、こなたに背を向け、思い切り鼻を咬む
そして、布を仕舞うと振り向いてこなたの顔を見た

「有難う、そなたは心優しき子であるな」
「いやぁ～、褒められると照れちゃうな～」

こなたは褒められているのは分かるが言ってる事はさっぱりなのに
少し照れていた
それを見て武将も笑う

「そうだ、お前は鬼の子なんかじゃない・・・立派な人の子だ」

それを、物陰から慶次が眺めていた
その表情はとても嬉しそうだった

「また派手にやったな。慶次」
「お、助右衛門か・・・」

そこには、黒い髪に薄い羽織を羽織った青年が立っていた
慶次の親友「奥村　助右衛門」である

「なぁに、何時もの事さ」

慶次は大して気にも留めてない素振りを見せた
だが、それを見て助右衛門は呆れたように苦笑いを浮かべる

「おいおい、内の武将を殴り倒してそれが何時ものことだと言われた日にはこちらは適わんぞ」
「へ、悪かったな」

慶次がバツの悪そうな顔をする
その後二人して奥にいるこなたを見た
こなたは、相変わらず無きじゃくる武将の頭を撫でていた

「あんなに優しい子が、鬼の子などと呼ばれているとなると、正直やりきれんな」

助右衛門は悲しい顔で言った
だが、当の慶次はというと・・・

「ま、あいつは気にしてない様だしな・・・それに、もうあいつを

鬼の子等と言う輩は居なくなるだろう」
慶次の予想は的中した
その後、こなたに慰められた武将は配下の全員にこなたの心の広さを伝えた
これを機に、彼女を鬼の子と蔑む者は居なくなったという
・・・が、やはりこなたの悪戯は治らず、武将達もたじたじであった

・・・それから１０年後

こなたは１５歳になった
この時代で１５と言えば立派な大人であるのだが・・・
「お前・・・本当にちっこいなぁ・・・」
２５歳の慶次がこなたの頭を摩って言った
それに対し
「む～、慶次兄ちゃんがおっきすぎるんだよぉ」
こなたが顔を膨らませて怒った
事実、こなたと慶次の身長差はかなりあった
こなたが今風に言うと１４０ｃｍ位
慶次が今風に言うと約２００ｃｍ位はあった
６０ｃｍも身長差があるのだ
慶次は大きすぎるが、こなたは逆に小さすぎた

「大体いい年のもんがそんなちっこかったら嫁に困るだろうが」
「大きなお世話だよぉぉだ！」
こなたがべっと舌を出して言った
それを見て慶次が笑う
すると・・・
「け・・・慶次殿・・・」
よろよろと武将が歩いてきた
「何だ？その顔は・・・」
慶次は歩いてきた武将の顔を見て驚いた
見ると、武将の顔は酷い痣だらけであった
「ひ・・・広場・・・広場で・・・あぅ・・・」
広場と言い残して武将は気を失った
「お、おい・・・何だ一体？」
慶次は首を傾げていたが、仕方なく広場に向かっていった
＊＊＊
広場に向かった慶次達は目の前の光景を見て驚いた
「な、何だありゃぁ・・・」

見ると、前田家に仕える武将達が肩で息をして倒れていた
その中央では
「どうした！噂の前田家の実力はこの程度なのか？」
紫色の髪を後ろに束ねた目つきの鋭い少女が木刀を片手に仁王立ちして叫んでいた
「け・・・慶次殿～～、我等ではとても勝てません～」
武将の一人がすがるように寄って来た
「慶次？・・・あなたが前田慶次殿ですか？」
「おう！俺が前田慶次だ！」
聞かれたので慶次は返答した
「私は柊　かがみと申します、噂の前田慶次殿にお願いがあります」
「俺に・・・何の用だ？」
「一手ご指南お願いします」
かがみはもう一本の木刀を慶次に向かって投げつけた
それを慶次は片手で受け取る
「お、おいおい・・・いきなりだなぁ・・・」
「問答無用！さぁ、いざ尋常に「やっほ～」え・・・」
突然かがみの目の前にこなたが飛んできた

「な・・・何て跳躍力なの・・・」
かがみはこなたの跳躍力に驚いていた
現に踊り場から広場まで５ｍはあるのに、それをこなたは一飛びで飛んできたのである

「何だ？こなた・・・お前がご指南したいのか？」
「うん、私やる！」
こなたが両手を振って気合を表した
それを見て慶次も納得し、木刀を床に置いてその場に座り込んだ

「な！何言ってんの、私は子供とじゃれあう為に来た訳じゃないの、さっさと退きなさい」
「え～、いいじゃん！遊ぼうよ～」
「遊びじゃない！いいからさっさと退け！・・・さもないと」

ビュンッ！

かがみは突然こなたに向かって木刀を振るった
木刀はこなたの面前を霞め、そのまま振り終わった
それを見て武将達は凍りついた

「次は当てる！」

ぼそりと言ってこなたを睨み付けた
その視線には、今までには無い気迫が感じられた
しかし・・・こなたは全く動揺しておらず・・・

「いいよ、当ててごらん」

「な・・・」

明らかに挑戦的な言葉を吐いた
それにかがみの堪忍袋の緒が切れたらしく

「そこまで言うなら・・・覚悟！」

かがみは叫ぶと同時に疾風の如き速さで木刀を振るった
しかし

「うわぉ、早い早い」
「え？」

その場にこなたは既に居なく、周りを見回すと

「嘘・・・何で？」

何と、こなたはかがみの背後に居た
一瞬でかがみの後ろに回ったのだ

「い、いつの間に・・・」
「ね～、早く次やろうよ～」

こなたが退屈そうに駄々をこねだした

「くっ、舐めるな！」

かがみが渾身の力を込めて振り込む
2撃・・・3撃・・・
しかし、その攻撃をこなたはことごとくかわしてしまう

しかも・・・

「ぎ、ギリギリでかわしているのか・・・」

武将達の目にはこなたがかがみの太刀を紙一重でかわしているように見えた

嫌、実際そうであったのだ

こなたはかがみの振るった木刀が当たるギリギリを見切って完全にかわしているのだ

「くっ・・・この・・・はっ・・・」

かがみの顔に段々焦りが見え始めていた

当然見ている武将たちも凍りつく思い出見ていた

だが、とうの慶次とこなたは実に涼しい顔をしていた

「はぁ！」

かがみが木刀を縦に振り下ろすが・・・

「い！居ない・・・」

突然かがみの面前からこなたが消えてしまった

「ど・・・何処？」

周りを見回してこなたを探すかがみ・・・すると

「ひゃぁ！」

突如、足に寒気を感じ声を挙げてしまう

「な、何？」

振り返ると、そこにはかがみの袴を捲っているこなたが居た

「う～む、中々綺麗な足ですな～」

こなたは満足そうにかがみの足を眺める

「な！何やってんだあああ」

咄嗟に距離を離す

だが、そのかがみの顔は真っ赤になっていた

「どったの？顔が真っ赤だよぉ？」

「うううう、五月蝿い！」

動揺を隠すかのように叫ぶかがみ

こなたはそれを見てニヤリと笑う

「こ・・・こんの～～」

今の行為で完全にかがみが切れたらしく、更に振りが激しくなっていった

その速さは、先ほどの武将達とは比べ物にならない程であった

「は、速い・・・慶次殿！早く二人を止めねば・・・」

武将は青い顔をして慶次に進言した
だが、慶次は・・・
「ほっとけほっとけ」
何時の間にか寝転んでいた
しかも大きくアクビまでして
「な、しかし・・・」
「心配要らねぇよ、あんな振り方してたらあいつには絶対木刀は当たらんからな」
慶次は何か意味深な言葉を発していた
正にその通りであった
かがみが必死になって振っているにも関わらず、こなたには一本も当たってはいないのだ
しかも、こなた自身はかなり余裕の顔をしていた
「くっ、こんのおおおお」
かがみは残る力を振り絞って剣を振り上げる
「やふ～」
そこへこなたが飛び掛る
「え？きゃぁ！」
かがみが悲鳴を挙げた

何と、こなたが飛びついて胸に顔を埋めていたのだ

「む～、男かと思ったけど・・・結構大きいねぇ」

こなたがニンマリした顔で言う

それにかがみが反応し、途端に顔の全てが真っ赤になりだす

「い・・・・い・・・・・・いやあああああ」

ゴンッ

「ンギャ！」

咄嗟に放ったかがみの鉄拳は見事にこなたの頭に命中した

「え？・・・あれ？・・・・」

「「「うそぉ？」」」

見ていた武将達は勿論、殴ったかがみ自身も信じられないと言うような声を挙げていた

「う～～、酷いよ～～、いきなり殴るなんて～」

こなたが半泣きで起き上がった

頭には、巨大なタンコブが出来ており、それを痛そうに抑える

「な・・・何で当たったの？」

かがみが信じられないと言いたげな顔をしていると・・・

「その拳には殺気が篭ってないからさ」

そこへ慶次が言葉をかける

「どういう事ですか？」

かがみが不審に思って聞く

「かがみ、お前木刀を振るう時必ず殺気を込めてるな？」

慶次の問いに「勿論です」とかがみは答えた

「こなたはな、その殺気に敏感なんだ。だから殺気を込めて振るったんじゃこなたには決して当たらないんだよ」

「成る程！」

それに真っ先にこなたが反応した

「いや、そこはあんたが反応するとこじゃないでしょ！」

すかさずかがみがツッコミを入れる

「再び成る程！」

「・・・・・」

返す言葉が無かった

「だけど・・・殺気の篭ってない攻撃にはこいつはからっきしに弱いんだよなぁ」

慶次はちらりと手元を移し、足元の木刀を掴むと、突然こなたに向けて投げつけた

「え？」
「よ」

かがみは驚いていたが、こなたは全く動揺せずに片手で木刀を掴んだ

「な、反応するだろ」
「いや・・・そんな風に言われても・・・」

かがみが返答に困っていると

「あ、お姉ちゃんここに居たんだ」
「何奴！」
「つ、つかさ！」

かがみと同じく紫色の短髪に黄色いリボンをつけた少女がやってきた

「はううう・・・怖いよぉ・・・」

痣だらけの武将達を見て途端につかさは怯えだした

「あんたはもう・・・終るまで出てくるなってあれ程言ったじゃないの」
「だって～」

つかさが今にも泣きそうな声で言った
流石にそんな顔をしたのか武将達も不味い顔をしていた

「へぇ、かがみんには妹が居たのかぁ（ニヤニヤ」
「な、何よ・・・」
「あれ？お姉ちゃん・・・この人は？」
かがみは溜息をついて、つかさに一通り紹介した
「そうなんですか・・・あ、私柊　つかさって言います。お姉ちゃんがご迷惑をおかけしたみたいですけど・・・」
つかさが謝ったので武将達は揃って首を振っていた
「ところで、何でかがみんは広場で暴れていたの？」
「え？それは・・・ってか、ちょっと待て」
説明しようとしたが、かがみがあることに気づいた
「その「かがみん」って何？」
「え？あだ名だよ！可愛いじゃん」
「普通に呼んでくれないか？」
「え～」
明らかに不満そうにこなたが言った
ま、それは置いといて
「私達はこの前田家に仕える為に来たのですが、そしたらそこの人達に『それならまずは我々を倒して見せよ』って言ったので」
「それで、皆をコテンパンにしたんだ？」
こなたの問いにかがみは多少顔を赤らめたまま頷いた
こなたは納得して武将達を見る

こなたの視線が武将達にはとても痛かった

「なぁんだ、お前等そんな事言ってコテンパンにされたんじゃねぇか・・・だせぇ」

慶次は隠す事無くズバッと言い切った

それを聞いて武将達がグサリと心が何かに貫かれる音がすると

バタバタと倒れてしまった

「け・・・慶次殿・・・幾ら何でもその一言は酷いと思いますよ」

流石にかわいそうに見えたのかかがみが武将達に同情の言葉を投げかける

「おおお、かがみ殿はお優しい御方じゃぁぁ」

途端に武将達がかがみに寄る

「べ、別に貴方達の為に言ったのではありませんからね・・・」

「優しい」の言葉に反応したのかかがみの顔が途端に真っ赤になる

（ニヤニヤ）

それを見てこなたが笑みを浮かべる

「な、何？」

その笑みに気づきかがみが聞く

「いやぁ、かがみんって照れ屋さんだねぇ」
「そ・・・そんなんじゃ・・・ないわよ・・・」

否定しているが、相変わらず顔は赤いままだ
しかも頭からは湯気が出ている始末である

「おんやぁ、さっきと言葉使いが違ってるよぉ、ひょっとして今のが素の言葉使いなのかなぁ？」
「う・・・」

言葉に詰まった
これ以上口を開くと、墓穴を掘りそうだと思ったからである
しかし、口を紡んだからと言ってそこで引き下がるこなたではない

「図星？・・・黙り込んでるのってひょっとして図星なのぉ？」

すかさず追い討ちをかける
しかもかなりしつこい

「そ・・・そんな事は・・・ない・・・けど・・・」

口を開くが、かなり無理がある口調であった
しかも視線を反らして言うのでこなたはますますニヤリとする

「か～がみ～ん、人と話す時はちゃんと人の目を見ないと駄目だよ～」
「わ・・・分かったわよ・・・」

仕方なくかがみはこなたの顔を見る
すると、こなたはかがみの顔に近づく

「な！！」

突然の事に仰天するかがみ
その反応を見て明らかに面白がるこなた
そして、その二人を目を点にして見ているつかさ

「何をしておるか！」

そこへ、野太い声が聞こえてきた

「「「利家様！」」」

武将達が声の主に跪く

「あ、おじき・・・」

慶次が顔だけ向ける
そこには、髪が白髪混じりになり立派に髭を生やした強面の老人「前田　利家」がいかにも不機嫌そうな顔をして立っていた

「貴様等、その失態は一体なんだ？」

利家が武将達に怒鳴りつける
それを聞いて武将達の肩がビクつく

「揃いも揃ってそこの女子一人にやられるとは・・・それでも栄えある前田家の武将か？恥を知れ！」
「「「も・申し訳ありません・・・！」」」

武将達が一斉に頭を下げる
利家は眉間に血管を浮き上がらせており、今にも怒りが爆発しそうであった

「まぁまぁ、利家のおじさんもあんまり怒るとハゲるよぉ」

そんな利家にこなたは軽口に言う
そんなこなたを利家が睨む

「ええい、小童の貴様に分かるか！ワシのこの怒りが」
「分かんないよ、そんなの・・・」

利家の言葉にこなたは即座に返答した
その言葉を聞いて利家の顔が更に強面になる

「ちょ、こなた・・・」

流石にその強面を見て少し恐れたかがみが小声でこなたに言う

「何言ってんの、下手なこと言ったらあんた斬られるわよ」
「え？何、聞こえないよ！」

折角小声で囁いたのにこなたは大声で返した

「くぉぉらぁぁ！何を話しとるんじゃぁぁぁ！」

怒りＭＡＸになった利家が大声で怒鳴る

「実は、この人がここに仕官したいんだって」
「ちょ、こなた・・・」

こなたが考え無しに利家に進言した

「なあああああにいいいいい」

利家の目が真っ赤になる
歯を剥き出しにしてあたかも鬼のような形相であった

「い・・・いえ・・・あの・・・その・・・」

その顔に怯え声が出なくなったかがみ
数歩下がるが、それでも利家の威圧感は漂っている
まるで刃物を突き立てられている感覚であった

「よし、いいだろう」
「え？」

その時の言葉は、かがみの意表を突いた
利家の顔はさっきとは打って変わって元の肌色に戻っていたし、
額の血管も何時しか消えていた
先ほどの鬼の形相から一変して只の老人の顔に戻っていた

「我等の武将をこれほどまでに痛めつける程の豪傑なのだ、むしろ
願っても無い事よ」

利家は自慢の髭を弄びながら呟いていた
かがみはさっきまでの緊張がやっと抜けたのか深く息を吐く

「良かったねぇ、かがみん」

そんなかがみにこなたが擦り寄る

「な、ひっつくな！」

「え～、いいじゃん！これから一緒に生活するんだからさぁ」

そう言ってこなたはかがみに抱きついた

再びかがみの顔が真っ赤になる

そして

「いい加減にしろぉぉぉ」

ゴンッ！

「あべしっ」

本日2度目の拳骨がこなたに命中した

「ほほぉぉ、あのこなたを殴るとは・・・流石は豪傑だ」

利家はそれを見て感心していた

「良かったね、お姉ちゃん！」

つかさはその横で手を叩いて喜んでいた

「む、そこの娘は誰だ？」

利家がつかさを指す

「あ、利家様。この者は私の妹のつかさで御座います」

かがみが簡潔に紹介する
つかさは紹介をされペコリと会釈する
「ふむ・・・妹か・・・そちは何か出来るのか？」
利家がつかさに聞いた
「はう・・・えっと・・・あの・・・その・・・・」
途端にオロオロしだすつかさ
そんなつかさを見て溜息をもらしたかがみが代わりに説明する
「いえ、武術はからっきしで御座いますが、炊事は大した物です」
「ほほぉ、飯炊きが出来るのか・・・よし、そちも置くとしよう」
利家の寛大な処置であった
「おじき～、とうとうまつ殿だけじゃ足りなくなったのか？」
慶次がニヤリと笑いながら聞く
「んな訳あるか！おまつはこの国に二人と居ない絶世の美女だぞ足りないどころかこっちが持たんわ」
利家が別の意味で顔を赤くした
そんな利家を見て慶次もこなたもニヤニヤしていた
「な、なんか・・・凄い所に仕官しちゃったわねぇ・・・」

かがみは今更ながら、少し後悔気味であった
「お姉ちゃん！お互い頑張ろうね！」
つかさは緊張感のかけらも無い顔で言っていた
そんなつかさがかがみは少し羨ましかった

・・・翌日

かがみが前田家の正式な武将となった次の日騒ぎは突然起こった
「うごわあああああああ！今度は拙者にいいいいいいいい」
屋敷中に響く大声
その声に反応し、かがみは一目散に声のした方に向かった
「どうしましたか！」
ふすまを開け放ったかがみはその直後、硬直した
「おお、かがみ殿か？今度は拙者の褌に落書きが・・・」
バタン！
言い終わる前にかがみはふすまを閉じた
顔は真っ赤になっている
無理もない、武将になったとは言え、年頃の娘である
褌一丁の男を見て動揺してしまったのだ

「かがみ殿、何故閉めるのだ？」

そのふすまを武将が開けた

無論、褌一丁のまま

「ふ、服を着てください！」

そう一言言って再びふすまを思い切り閉めた

・・・数刻後

服を着た武将は部屋から出て何故騒いだかをかがみに話した

「え、悪戯ですか？」

「うむ、恐らくまたこなた殿の仕業であろう」

「あ・・・あいつが元凶なんですか・・・」

かがみは目を引き攣って聞いた

確かに、あれほどの素早さを持っていればそんな事は容易い筈である

「全く、慶次殿の妹君のせいか、その慶次殿に負けず劣らず悪戯好きなのは困った者だ」

武将は深く溜息をついた

「その悪戯って、そんなに酷いんですか？」

かがみが聞いた

「酷いなんて物じゃない、もうこなた殿が3つの頃からずっとこの調子なのだ・・・最早我等ではどうにも出来んのだ」

すっかりお手上げ状態で武将は呟いた

まさかそれ程までにこなたの悪戯が凄いとは思いもしなかった

そこへ

「お姉ちゃん、利家様が呼んでるよ」

小姓の服を着たつかさが歩いてきた

かがみが武将であり、その身の回りの世話を妹のつかさがやっているのだ

ちなみに、飯炊きもつかさの仕事でもある

「利家様が？分かった、すぐ行くわ」

かがみはそう言って通路を歩いた

・・・所変わって大広間

利家の前にかがみは座っていた

「呼び出したのは他でもない、こなたの事だ・・・」

利家が疲れ切った顔で言った

（やっぱり・・・）

内心予想していたが、いざ出されると呆れるかがみである

「あやつの悪戯は日に日に増しておる、じゃがわしらではあやつを捕まえる事はまず不可能なのじゃ・・・そこでじゃ」

利家は折りたたんだ扇子の先をかがみに向ける

「え？私・・・ですか？」

「そうじゃ、お主にこなたの目付け役を頼みたい」

利家に言われかがみは驚く

「で、ですが！私でなくても他に若い武将等に任せれば・・・」

「無理なのじゃ」

「え？」

「今まであやつを殴れたのはお主を置いて他におらんのじゃ」

「え？それは一体どういう意味なのですか？」

かがみの問いに利家は話す

「かがみよ、こなたの髪を見たか？」

「はい、青い髪をしていましたが・・・」

「うむ、お主も知っておろう・・・青い髪の伝承を・・・」

「確か・・・”青き髪の子、近づく者に災いをもたらす”ですか？」

「その通りじゃ」

かがみも噂程度にそれを知っていた

しかし、かがみ自身はそれを迷信と思っていたのであまり気にしては居なかった

「他の武将達は災いを恐れる余り、満足にこなたを止める事が出来ぬのじゃ、かと言って慶次はこなたに甘すぎる・・・そこでお主じ

や」
「私・・・ですか・・・」
利家は深く頷く
「お主は別に青い髪と言って恐れる節も無い、それどころかあのこなたに鉄拳を当てられる逸材でもあるのじゃ、お主を置いて他にあるまい」
利家はうんと頷いた
かがみは少し考え込んだ
そして
「分かりました、その任しかと承りました」
「うむ、頼むぞ」
こうしてかがみとこなたの関係が築かれたのである
・・・んで、早速
ゴンッ
「ひでぶ！」
最初の仕事として悪戯をしたこなたに修正を加えるという仕事を任されてからたったの5分で成し遂げたのだ
「流石かがみ殿だ・・・」
武将達がかがみに賞賛の声を挙げる
かがみはそれが少し恥ずかしく感じた

「むむ～、次は掴まらないぞ～」
「あんたも少しは懲りなさいよ」
こなたは相変わらず次の悪戯を模索していた
そんなこなたにかがみは呆れ果てた
「お姉ちゃ～ん、こなちゃ～ん、ご飯出来たよ～」
そこへつかさの間の抜けた声が響く
「うわ～い、ご飯だあああ」
そう聞くや否や颯爽と駆け出していくこなた
「あ・・・あいつ・・・」
最早あきれ返って言葉も無かった

＊＊＊

「どうぞ」
武将達全員に料理を行き渡らせつかさは退出した
「どれ、毒見役を寄越せ」
利家が手を叩く
しかし

「そんなの待ってらんねぇよ」
「いただきま～す」
慶次とこなたは毒見役を待たず食べ始めた
おかずを箸で取り、口に運ぶ
・・・そして
「う・・・美味い！」
「うみゃ～」
途端にこの声である
そして、自我を崩壊したかのように食べ始める
「け、慶次殿・・・大丈夫で御座るか？」
「こなた殿もいつもより凄い勢いで御座るが・・・」
その二人を武将達が心配そうに眺める
「何だ？お前等食わねえんなら俺が食うぞ」
「し、しかし・・・まだ毒見が・・・」
「んなもん待ってられるかよ、俺達が食って何とも無いんだから大丈夫だろ？」
「た、確かに・・・」
武将達は恐る恐る料理を口にする
「こ、これは・・・」
「う、美味いぞ」
「たまらん」
「ひゃー美味い」

絶賛の声が上がる
そしてがっつく
「むぅぅ・・・」
利家も我慢出来ず遂に口にする
・・・そして
「こ、これは美味い・・・」
利家もまた同じ様にがっついていた
「これって・・・」
「えへへ・・・いつも通りに作ったんだけど・・・」
その奥でつかさが頬を掻いていた
顔を赤く染めて
「つかさ・・・どうやらあんたの料理は馬鹿うけみたいね」
「うん、喜んで貰って本当に良かった」
つかさはとても嬉しそうに答えた
かがみは、少し変な気分だったが・・・
「「「うおぉぉぉぉぉぉ」」」
かがみの横では、つかさの料理に夢中になっている武将達が叫んでいた
かがみは、そんな声を聞きながら黙々と食事をした

「は～～、食った食った・・・」
「もう食べれないぃぃぃ・・・」
慶次とこなたは食事を終え、大広間で大の字になっていた
結局、あの後二人は5杯近くもお代わりをしたのだ
幾ら何でも食べすぎである

「あんたも少しは自重しなさいよね」
「う～ん、甘い物と美味しい物は別腹って言うじゃん？」
「言わないわよ！」
寝ながらボケるこなたにツッコミを入れるかがみ
「ふう・・・これ程美味い飯はおまつだけかと思ったが・・・お主の妹は中々の腕じゃのう」
利家は満足そうに楊枝を結わえていた
「まぁ、それ以外はからっきしなんですが・・・」
かがみが申し訳無さそうに付け足す
「けど、ここまで出来るのは相当なもんだぜ」
そんなかがみに慶次が言う
それを聞いてかがみも少し鼻が伸びる思いだった

＊＊＊

食事を終えたかがみは自室で書物を読んでいた
この時代にはパソコンや漫画等は無く、あるとすれば字だけの書物位である
かがみ自身別にそれ程書物が好きではなかった
が、夜になると暇なのでこうして普段読まない書物を読んでいるのだ

「・・・・・」

蝋燭の明かりを頼りにかがみは書物を読む
電気の無い時代の為、明かりと言えば蝋燭の明かりのみである
それ程暗い訳ではないが、はっきり言って明るいとも言えない位の明るさであった

「かがみん、起きてる？」
「こなた・・・」

ふすまを開けて、こなたがやってきた
既に寝る格好になっている
白い袴を着ていて、それと青い髪がとても綺麗に見えた

「あり、読書中だった？」
「大丈夫よ、それより何？」
「今から良い所に行くんだって、つかさも呼んで行こうよ」
「え、今から？」

かがみが動揺する
この時代では日が沈めば若い女子が外出するなど危険な事であった
万が一何かあったとしても助けなど呼べないし、辻斬りにでも会ったらそれこそ一巻の終わりである

「大丈夫だよ、慶次兄ちゃんも行くから」
「慶次様も・・・分かったわ、準備するから少し待ってて」
「うん、なるだけ早くね」
と言ってこなたはふすまを閉めた
「ま、慶次様が一緒なら安心か・・・」
と言ってかがみは蝋燭の火を吹き消した
それから少しして、外着を着たかがみが広場にやってきた
「お待たせしました」
「うっし、じゃ行くか」
広場では、既に準備を終えたこなたと慶次がいた
「はう～、まだ眠いよ～」
さっきまで寝ていたせいか、目を擦っているつかさもやってきた
「ハハハ、あれを見たら眠気なんかすぐに覚めるぞ」
慶次が笑いながら先導を歩く
かがみ達もそれに続く
「慶次様、一体何処へ行くのですか？」
「着いてからのお楽しみさ！」

慶次がニヤリと微笑んだ
少し嫌な予感がした

こなたと慶次がニヤけるのは、大概悪戯を思いついた時位だからだ
そして、その笑顔を慶次はしたのだ

（まさか・・・何か悪巧みを・・・）

かがみは咄嗟に引き返そうと思った
しかし、つかさを見ると、とても楽しそうな顔をして歩いていた
それを見てかがみは引き返すのをやめた

（ま、こうなったら何が出ても驚かないようにしなくちゃね）

そう言ってかがみは気持ちを切り替えた

「着いたぞ」

やがて、慶次達は高い丘の上に着いていた

「あの、慶次様・・・ここは？」

かがみが聞く
そこは、言わば断崖絶壁の崖の上である
下を見たが、かなり高い
しかも、その下は葉の枯れた木ばかりである
下手に落ちたら串刺しになるだろう

「・・・・（ブル」

かがみは一瞬自分が落ちた時を想像してしまい身震いしてしまった

「さて、そろそろかな・・・」

慶次が座り込み、空を見上げる

「え、そろそろって？」

「かがみん、空を見なよ」

「空？」

かがみはこなたの言われた通りに空を見上げた

そして、言葉を無くした

「こ・・・これは・・・」

「きれい～～～」

空では、沢山の流れ星が流れていた

まるで流星の雨である

「へへ、丁度１０年だからな」

「何時見ても綺麗だね～」

慶次とこなたは前に一度見たのか懐かしむ様に見ていた

「こなた、ひょっとして・・・これを見せたくて？」

「うん」

こなたはニコリと笑って頷いた

「因みに、これは私達だけの秘密だからね」

「え？それじゃ何で私とつかさに教えてくれるの？」
「だって、二人は私の始めての友達だもん」

それを聞いてかがみは納得した
こなたには今まで友と呼べる存在が居なかったのだ

周りは年上で頭の固い人間ばかり
唯一話の分かる慶次でも、年が１０も離れていればそれは友達とは呼べないのだ

（そっか、こなたは本当は寂しかったんだな）

かがみはそう思った
そう思うと、今までの悪戯が何故か可愛く思えてしまうのも何故か不思議である

「フフン、でもだからって私に惚れちゃだめだよぉ、かがみん」
「はぁ？」

突然何を言い出したのか
かがみには意味不明だった

「だってさ、かがみんってば変な目で私を見てるからさ」
「な、そんな訳無いじゃない！」

咄嗟にかがみは目を背けた
しかし、顔は真っ赤になっていた

「顔が赤いよぉ、ひょっとして図星なのかなぁ？」
「違うってば！」

声を大きくして否定する

「そんな大声で言うなんて、ひょっとして本当に私の事を・・・」

ゴン！

「いい加減にしないと殴るぞ」

「もう殴ってるじゃん！かがみん凶暴！」

頭を押えながらこなたが言った

「なんならもう2～3発位オマケしてやろうか？丁度こんな流星が流れてるし、一発くらい流れ弾が当たっても可笑しくないしねぇ」

かがみが腕をボキボキ鳴らす

「ちょ、タンマ！そんなに殴られちゃ死んじゃうよぉ！」

「フフ、冗談よ」

パッと腕を元に戻した

「今日は・・・有難うね・・・こなた」

「ムフフ～、どういたましてだよぉ。また来ようね」

「そうね、また・・・１０年後にね」

そう言って二人は約束した

「ＺＺＺ・・・」

「あれ？どうりで静かだと思ったら、つかさ寝てるわ・・・」

「あ、本当だ！」

二人が話している横で、つかさが静かに寝息を発していた

「ハハハ、つかさにはまだ早かったかな？」

「そうでもないですよ。きっといい思い出になったと思います」

「そうか・・・それなら俺も連れてきた甲斐があったってもんだぜ」

慶次が得意そうに胸を張った

「ふわぁ～、でも本当にもう眠いやぁ」

流石にこなたも眠くなってきたようである

「そうね・・・もっと見たいけど・・・私ももう眠いわ・・・」

かがみも眠い目を擦っていた

「ハハハ、そうだな。んじゃ帰るか」

慶次は立ち上がり寝ているつかさを背中に乗せた

「慶次様！つかさは私が負ぶって行きますから」

「気にすんなって、それより早く帰んないと他の奴等に見つかっちまうぜ」

そう言って慶次は足早に歩いていった

二人もそれに続く

こなたにとっては、生まれて初めて出会った友達

その友達と一緒に眺めた星空
こなたは一生忘れないであろう

そう・・・決して

第3話へ続く

第3話　嫌いな物（前書き）

今回はちょっと重い話になると思います

第3話　嫌いな物

第1章　第3話　「嫌いな物」

「こなた殿！今日こそは剣技の鍛錬を・・・」

「やだよ～」

道場で稽古をつけようとこなたを連れてきた武将「柴田　勝家」であったが、またもやこなたは逃げ出してしまった

「待たれぇ！今日という日はちゃんと剣技の鍛錬をして貰いますぞぉ」

「剣は嫌いだからやだ！」

即答で拒否した

しかし、それで引き下がる勝家では無い

「なればここを抜けたくば某を倒してから行かれい」

「え～」

勝家は入り口で仁王立ちした

大きな体が入り口を覆い隠し、キッと睨んだ眼差しがここを通すまいとする意気込みを感じさせた

こなたは多少面倒臭そうな顔をした

実際面倒なのだ

かがみが来てからこなたの悪戯はそれほど酷くはならなくなったが、一向にこなたは剣技の鍛錬を嫌がるのだ

今日だって勝家が時間を割いてまで鍛錬をしに来たというのに
それをこなたは嫌がっているのだ

「さぁ、どうなさる？」
「む～」

勝家が大声で叫ぶ
巨体が示す通り野太い大きな声である
大抵の者ならその一声で肝を潰しそうな物である
しかし・・・

「んじゃ、飛び越えちゃえ～」
「なにぃ？」

ピョンと跳躍してこなたは勝家の頭上を飛び越えた
「しまった」と勝家が思った時には既に手遅れだった
道場を出てこなたを探したが、その姿はもう何処にも無かったのだ

「じゃ～に～」
「うぬぅ・・・またしても逃げられたのか・・・」

勝家が悔しそうに頭を掻く
そして、道場に木刀を投げつけ、何やら呟きながら廊下を歩いて行った

「おや、勝家殿ではありませんか。どうしたのです？」
「む、助右衛門殿か・・・またしてやられたわ・・・」

通路を歩いてきた助右衛門に対し勝家が悔しそうに言った

「また？・・・またこなたが剣技の鍛錬を逃げ出したのかい？」
助右衛門の問いに勝家が静かに頷いた
それを見て助右衛門が溜息をつく
「困った物だ、あの子は体術の鍛錬は喜んで受けるんだが、どうしても刀や槍といった武器の鍛錬を仕切りに嫌がるからな」
「全くだ、この時代刀を扱えぬようでは生きてはいけぬと言うのに・・・」
勝家がどかりと廊下に座り込んで庭を見た
庭では小姓達が庭の手入れをしている
そして、そこには既に前田家に溶け込んでいるつかさの姿もあった
「つかさ、そっちの方は終ったのかい？」
「はい、終わりました」
掃除の班長がつかさの区画の点検を行う
「うん、いい感じだね。それじゃそろそろ飯の仕度を始めようかねぇ」
「はい」
つかさは返事をして掛けていった
「ふぅ、仕方ない・・・慶次に相談してみるか・・・」
「頼みます」
助右衛門に後を託し、勝家はのっしのっしと通路を歩いていった

＊＊＊

「と、言う訳だ慶次、何とかならんか？」

助右衛門は早速慶次の元に来ていた

慶次はと言うと、屋根の上で日向ぼっこを楽しんでいた時であった

「そりゃ無理だな助右衛門」

慶次はアクビをして答えた

口を目一杯に開き、歯を剥き出しにし、目から涙を出している

一方で、助右衛門はまいったなと頭を掻いていた

「お前でも駄目なのか？」

こなたは大概慶次のいう事は聞くのだ

その為、体術の鍛錬は専ら慶次が担当している

だが、その慶次でも駄目と言われたらそれこそ終りである

「あいつは、人を殺す道具が嫌いなんだ」

「人を殺す道具が嫌い？」

慶次は起き上がり脇に挿していた小太刀を抜いた

そしてそれを助右衛門に見せる

「あいつはな、刀から漂う鉄の匂いが大嫌いらしくてな・・・以前刀を近づけたら物凄い嫌がられたもんだ」

「成る程な・・・」

助右衛門が納得して頷いた

「ま、という訳さ・・・分かったらあいつに剣技を習わせるのは止めるんだな」

慶次はそう言うと再び大きなアクビをした

それを見て助右衛門が深く溜息を漏らす

やれやれ・・・

＊＊＊

道場を逃げ出したこなたは自室で何やら仕度をしていた

「あら？こなた、あんた何してんの？」

そこへたまたまかがみが通りかかった

見ると、こなたは髪を束ねてその上に黒く塗った髪・・・現代風に言う「かつら」を被っていた

「これから町に降りるんだよ」

「へ～、町に・・・って何ィィィィ！」

しばし間を置いてかがみが驚いて声を挙げる

「何をそんなに驚いてるの？」

こなたはかがみの心境が分からず首を傾げた

「何って、あんた本気で町に降りるの？」

「勿論！これからお目当ての本を探しに行くの」

そう言ってこなたはかつらを被る
青い髪はかつらにスッポリと隠れ、代わりに黒い美しい髪が見えた
「でも、それなら何でかつらなんか被るの？」
「だって、被らないとお店の人が怖がって物売ってくれないんだよ」
そう言われかがみが納得した
確かに、こなたの髪を見て不審がったり気味悪がったりするのも分かる気がする
自分は別に気にはしていないが、それでも鬼の子と恐れられていたのだから隠さなければそれこそ大騒ぎになる事は間違いなかった
「ところで、あんた何買いに行くの？」
「うん？新作の春画だよ」
「春画？」
かがみには初耳であった
と言うのも、かがみ自身浮世絵などは見たが春画と言う名前は聞いた事が無かった
「どんなの？」
「こんなのだよ」
と言ってこなたは試しに一枚の絵を見せた
そこには、一組の男女が○○○で△△△な事をしている絵であった
ボンッ
突如、かがみの顔が真っ赤になり、頭から湯気が立ち上った

「ななな、何て物見てるのよあんたは・・・」
明らかに動揺しながらかがみは言った
「ムフフ～、かがみんってこういうのに態勢ないんだねぇ」
「ちょ、ちょっとビックリしただけよ・・・」
「ほほぉ・・・良かったら今度貸そうか？」
「いらん！」
かがみが未だに顔を真っ赤にしてるのを見てこなたは面白そうにニヤけた
「何ならこれから一緒に行かない？」
「え？行くって？」
「町に」
「はぁぁ！」
かがみはこの日一番大きな声で叫んだ
＊＊＊
そんなこんなで、結局こなたに連れられてかがみも町にやって来た
「はぁ～、結局来ちゃったよ」
かがみが大きく肩を落としていた
その横では
「おおぅ、やっぱりシャバの空気は美味いなぁ」

「あんたねぇ、それじゃ城の中がまるで牢屋みたいじゃない」
こなたは場違いな程はしゃいでいた
「ムフフ～、そりゃそうだよ、何せ今日はお目当ての品がもう一つあるんだからね」
「え？春画だけじゃないの？」
「勿論！」
こなたは胸を張って言った
それを見てかがみが激しく溜息をつく
「それにしても、この町って人通りが多いわねぇ」
かがみはこの町の城下町は実は初めてなのだ
その為人の多さに少し驚いていた
（流石は前田家・・・人望が厚いのねぇ）
かがみが納得していると
『喧嘩だあああああ！』
「え？喧嘩ぁぁ！」
遠くから男の叫び声が聞こえた
「こうしちゃ居られないぜぃ」
「ああ、こなた！」
そう聞くと、こなたは一目散に喧嘩の場所へ向かった

「ったく、巻き込まれるわよ」

かがみもその後を追う

「おるぁぁ！」

「おらぁぁ！」

喧嘩現場では二人の男が殴りあいの取っ組み合いをしていた

「うわぁ、凄い事になってるじゃないの・・・」

「あ、かがみん！こっちこっち」

「え？」

見ると、こなたは現場の近くの家の屋根の上に座っていた

そこでかがみに向かって手を振っている

「あ、あんた・・・何でそんなとこに居るのよ！」

「こっちの方が良く見えるよぉぉ！」

「良く見えるって・・・あんたねぇ」

呆れながらも結局かがみも上ってきたのであった

下の方では、いよいよ二人の男の戦いがクライマックスに差し掛っていた

「食らえ！大和魂ナックル」

説明しよう！

大和魂ナックル、とは日本人の誰にでも宿っている大和魂を全開に

して放つ超必殺拳なのだ！
「なんの、日ノ本パンチ」
説明しよう！
日ノ本パンチ、とは日本人にしか出せない究極の必殺拳なのだ
「うおおおおおおお」
「はあああああああ」
二人の男の必殺拳が互いにぶつかりあう
激しい火花、轟音、衝撃、閃光・・・
は、起こる筈も無く
「げはぁ」
「ごばぁ」
お互い必殺拳を受けダブルノックダウン
それを最後に二人は起き上がらなかった
（1時間位）
「な・・・なんなの？今の・・・」
「は～、終った～」
言葉の無いかがみに対し、こなたは満足そうに背伸びをする
それと同時に喧嘩を見ていた野次馬連中も蜘蛛の子を散らす様に退散していった
「さてと」

一息つくとこなたは屋根から飛び降り地面にネコの様に着地した

「にゃ～」

鳴き真似までして

「何やってんのよ、あんたは」

かがみはおっかなびっくりゆっくりと屋根から下りていた

まるで、ナメクジの様に

「変な考えするんじゃない！」

すみません・・・

＊＊＊

まぁいろいろあったが、とりあえず二人はお目当ての店にたどり着いた

「長かった、ここまで来るのにどれだけの時をかけた事か・・・」

「まだ半日も経ってないだろうが！」

しみじみと呟くこなたにかがみがビシっとツッコミを入れる

そんなかがみにひょっとこ顔をしてむくれるこなた

「は～、もう何かどっと疲れたわ・・・早く帰ろうよぉ」

「おやおや、かがみんは意外と体力無いねぇ」

「あんたと一緒にするな！この体力魔人」

こなたとかがみが店の前で言い合っていると

「おやおや、店の前が賑やかだと思ったらこなちゃんかい？」

「やっほ～、叔父さん来たよ～」

店の中からよぼよぼのお爺さんが歩いてきた

顔はしわくちゃで、髪は白くなり、腰はくの字に曲がっていて杖なしでは歩く事さえ困難な程の老人である

「いや～、懐かしいのぉ・・・もう１０年かのぉ、大きくなって」

老人はこなたを上から下まで見て嬉しそうに呟いた

（大きく？・・・何処が？）

かがみは目を擦ってこなたを凝視した

「かがみん、今酷い事考えてなかった？」

「え？何でもないわよ！」

結構鋭い奴だな・・・と思ったかがみである

「どうだいこなちゃん、折角来たんだし・・・中で茶でも飲まないかい？婆さんも居るしね」

「わ～い、いただきま～す」

子供のようにはしゃいでこなたが店の中に入っていった

「そこのお穣ちゃんも一緒に来なさいな」

「え？は・・・はい・・・」

老人に呼ばれかがみも店の中に入っていった

＊＊＊

老人に連れられこなたとかがみは店の中に入っていた
中は天井の高い和風の作り（当たり前だ）であり、とても歴史のある作りであった

「ほれ、何も無いが茶と菓子でもどうだい？」
「あ、でもわたしたt「いただきまぁす」ぬぁ」

かがみの話の途中でこなたは大声を上げて菓子を掴んで口に運んだ

「あ、あんたねぇ・・・少しは遠慮しなさいよね」
「ふぇ、いいひゃんふぇふにぃ」
「飲み込んでから喋れ！」

口に菓子を詰め込んだこなたにかがみが突っ込みを入れる

「ハッハッハ、良かったねぇ、こなちゃん。友達が出来て」
「うん、毎日楽しいよ！」
「はぁ・・・こっちは毎日大変だっての・・・」

嬉しそうに言うこなたに対し、かがみは溜息混じりで答える

「そうそう、こなちゃん。もう良いじゃろう、そのかつら」
「あ、そっか」

老人に言われこなたは頭のかつらを取る

そこから綺麗な青い髪が現れた

「いやぁ、相変わらず綺麗な髪だねぇ・・・婆さんもその髪が大好きじゃったからなぁ・・・」

老人は懐かしむように頷いた

「えっと・・・その御婆さんは？」

「おっと、そうじゃったな」

老人はポンと手を叩くと、再び奥へ歩いていった

「忘れっぽいのかなぁ」

「変わらないねぇ、お爺さんも」

二人が菓子を摘まみ、茶を啜っていると

「いやぁ、待たせたねぇ」

老人がやってきた

何故か一人で

そして、手に持っているのは

「そ・・・それって・・・」

「ほれ、ばあさんや・・・こなちゃんじゃよ・・・１０年振りじゃなぁ・・・」

老人は老婆の顔が映った絵をそっとこなたの前に置いた

ニッコリと優しそうに微笑んだ老婆の顔がこなたに映った

「そっか・・・御婆さんが死んだのも丁度１０年前なんだよね」
「うむ・・・そうじゃなぁ・・・」
こなたと老人は少し寂しそうに呟いた
「あ・・・あの・・・何か・・・すみません」
場の空気を重くしてしまったのを気にしてかがみが謝った
「気にせんでくれ、ばあさんもきっとあの世で喜んじょるよ、きっと・・・」
お爺さんはそう言って御婆さんの絵を戻しに奥へ行った
「実はね・・・御婆さん・・・辻斬りに遭ったんだ」
「え？」
突然こなたが口を開く
「今から１０年前にね、慶次兄ちゃんと一緒にこの店に来たんだその時はおじいちゃんもおばあちゃんも二人で迎えてくれたんだよ。とっても楽しかったなぁ・・・」
こなたが思い出すように呟く
「でも、その次の日・・・おばあさんは店の前で倒れてたんだおばあさんの周りには赤い水が広がっててさ、凄く鉄臭い匂いがしたんだ・・・それでね、触ったら・・・凄く冷たかったんだよ・・・呼んでも・・・擦っても・・・おばあちゃんは起きなかったんだよ」

かがみはそれを黙って聞いていた
何故なら、話をしていたこなたの目には、うっすらと涙が滲んでいたからだ

「いやいや、待たせたねぇ・・・」

そこへ、老人がよたよたと歩いてきた

「そう言えば、こなちゃん・・・ほいこれ」

老人の手からこなたに渡されたのは

「これって・・・」

「やふ～、やっぱおじいちゃんは最高だよぉ」

春画を手に持ってこなたは飛び上がった

「はっはっは、こなちゃんもそんなの見るなんて・・・もう立派な大人じゃのぉ・・・」

老人は枯れた声で笑う

「あんたねぇ・・・」

そんなこなたをかがみはあきれ返った目で見た

＊＊＊

「そんじゃまたね、おじいちゃん！」

「ほい、またな」

お目当ての品を買い、こなたは意気揚々と帰路に着いた

「人の良いお爺さんだったね」
「でしょう・・・私の穴場なんだ」
「穴場・・・ねぇ・・・」

こなたの言葉に返す言葉が無かった

「あのぉ・・・」
「「？」」

後ろから声がし、振り向くと、そこには桜色の長い髪をした少女が立っていた

「おや、みゆきさんじゃないですか」
「お久しぶりですね、こなたさん」
「こなた、この人知り合い？」

かがみがみゆきと呼ばれる少女を指す

「うん、あの店の孫なんだ」
「へ～」
「宜しくお願いします。高良　みゆきと申します」

丁寧に自己紹介をしてみゆきはお辞儀をした

「みゆきさん、ひょっとして私が来たから会いに来てくれたの？」
「はい、１０年ぶりですからね」

みゆきはニッコリと微笑んだ

「そうだねぇ・・・にしても・・・」

こなたはまじまじとみゆき（体中心）を見た

「みゆきさん・・・随分見違えたねぇ」

「え？そうでしょうか・・・」

「勿論！胸なんかもうかがみん以上にあるよ！」

「えええ？」

みゆきの顔が途端に真っ赤になる

「あ、あんたねぇ！いきなり何て事言ってるのよ！」

かがみも同様に真っ赤になっている

「そだ、みゆきさん今晩家に泊まっていかない？空白の１０年間を話したいしさぁ」

「ちょ、あんたは！」

かがみが言おうとしたのをこなたは手を制して止めた

「大丈夫だって、叔父さんはそんなに怒らないからさ」

「はぁ・・・あんたはもう・・・」

かがみはあきれ返っていた

「宜しいのですか？」

みゆきは恐る恐る聞いてきた

「勿論だよ！みゆきさんさえ良ければ万事ＯＫだもん」

「そうですか・・・では、お爺さんに許可を貰って来ますね」

と言ってみゆきは店に入っていった

「はぁ・・・本当に良いのかなぁ・・・」

「心配性だねぇ、かがみんも」

「あんたのお守りを任されてからずっとこうよ」

かがみはじと目でこなたを見た

こなたはそんなかがみの目を見ないように視線を反らした

「お待たせしました」

みゆきが小走りで掛けて来る

「お爺さんから許可を頂きました」

「そっか、じゃぁ行こう！」

こなたは先導を切って歩き出した

その後ろをかがみとみゆきがついていく

＊＊＊

「よぉ、こなた」

「おっす、慶次兄ちゃん」

屋敷に帰ってきたこなた達を慶次が出迎えた

相変わらずでかい

「お久しぶりです、慶次さん」
「む、ひょっとしてみゆきちゃんか？」
「はい、以前お世話になったみゆきです」

みゆきは慶次に会釈した

「いやぁ、暫く見ない内に随分綺麗になったもんだなぁ・・・
特に・・・」

慶次の視線がみゆきのある部分に集中した

「あ・・・あの・・・慶次さん？」
「いやぁ・・・ホント良くこんなに実ったのぉ・・・」
「あ・・・あんまり見つめられると・・・その・・・」

みゆきが顔を真っ赤にして言った

「ハハハ、悪い悪い・・・爺さんは元気か？」
「あ、はい。それはもう元気でしたよ」
「そうかそうか・・・今度遊びに行くかな」

慶次は大声で笑った

＊＊＊

こなた達はこなたの部屋に集まっていた
つかさもかがみも一緒でみゆきの昔話を聞きに来たのだ

「へぇ・・・あんた１０年前とほんの少しか背伸びてないんだ」
「むぅ・・・少しは伸びたんだよ！少しは・・・」
と言ってこなたは親指と人差し指を使って表した
「そうでもありませんよ、泉さんも以前よりずっと御綺麗になられましたよ」
「本当！みゆきさん」
「ええ、本当ですよ」
と言ってみゆきは眩しい笑顔を浮かべた
「ゆきちゃんってこなちゃんと一緒に遊んだ事あるの？」
唐突につかさが聞いた
「ええ、当初は泉さんも青い髪のまま来たのですが、流石にそれだと店に迷惑が掛かると言う事で慶次様がかつらをご購入なさったのですよ」
「ふ～ん、あれってお店の物だったんだ」
かがみはちらりと部屋の隅に置かれたかつらを見た
「泉さんはとても活発な方でしたから、一緒に遊ぶのも大変でしたよ」
「活発って・・・どれ位なの？」
「そうですねぇ・・・一跳びで屋根の上に上ってしまう位ですね」
「あんたは忍者か？」
かがみはこなたを見て言う

「フフフ、ばれたか・・・」
「ノリは良いから・・・」
最早ツッコむ気力も無いのかかがみがこなたのボケをサラリと流す
「そういえばゆきちゃんはお父さんとお母さんは居ないの？」
「いえ、居ますけど今は一人で旅をしています」
「一人で？何でまた・・・」
「その・・・いろいろと世の中を見てみたくて・・・」
みゆきが恥ずかしそうに答える
「うんうん、分かるなぁ・・・」
「あんたはしょっちゅうだろうが」
こなたが頷くのをかがみが返した
「皆さん仲がよろしいんですね。私はとても安心致しました」
みゆきが笑って言った
それに釣られてかがみとつかさも笑う
こうして、４人の楽しい夜は続いたのであった
・・・翌日

こなた達はみゆきを見送る為に町に来ていた

「わざわざすみません・・・皆さんでお見送りして頂けるなんて」

みゆきは申し訳なさそうに言った

「気にするなって、俺も丁度爺さんに会おうとしてたからさ」

慶次が気楽に返す

「そうそう、たまにはお爺ちゃんと世間話もいいかなって思ってね」

「へぇ、あんたが世間話を聞きたがるなんて、今夜は雪が降るわね」

こなたの言った言葉に対しかがみが意地悪く付け足す

「え？今日雪振るの？お姉ちゃん」

その横でつかさが素っ頓狂な事を言い出す

「つかさ・・・あんたねぇ・・・」

かがみが溜息混じりに言っていると

「あら？家の前に人が集まっていますね」

みゆきの指差した方を皆は見た

そこには、大勢の人が集まって騒いでいた

「何だろう？お店が繁盛しているのかなぁ？」

かがみがそう呟いた

「え～、あのお店ってそんなに人気無かったけどなぁ・・・・」

こなたが思い出す様に呟いた

（でも、何だろう・・・凄く嫌な気分になるな・・・あの人ごみ）

こなたは何故かあの人ごみが決して良い意味では無いと思えた

何故なら、こんな人ごみを以前にも見たからだ

・・・そう、丁度１０年前に

「！！！！」

こなたはハッとした

もしかしたら・・・

「慶次兄ちゃん！」

「ああ！」

お互いに相槌を打つと二人はすぐさま人ごみの中へ飛び込んでいった

「あ、こなちゃん」

「ちょ、こなた！待ちなさいよ！」

その二人を急いで皆が追う

＊＊＊

こなたの嫌な予感は最悪の形で的中した

「ああ・・・お爺ちゃん！」

「まさか・・・爺さんが・・・」

こなたと慶次の目の前には、地面の上に横たわる老人の姿があった
その背中には、刃物でバッサリと斬られた痛々しい傷跡が残って
おり、そこから流れたと思われる血が地面を彩っていた
老人の顔には既に生気が無かった
触ってみたが、それは以前と同じく、冷たく硬かった

「そんな・・・お爺さん！」

そこへやってきたみゆきが変わり果てた老人の姿を見て泣き崩れた
無理も無い、昨日まで元気に笑っていた老人が、今目の前で物いわ
ぬ屍と化してしまったのだからだ

”また辻斬りの仕業らしいよ”
”本当かよ？”
”嫌だねぇ、何でここの人が斬られるのかねぇ”
”分かんねぇよ・・・それより誰か退かせよ”
”全くだ、臭くてかなわん”
”あ～、臭ぇ臭ぇ”

周りで野次馬がすき放題言っていた

「・・・酷いよ」

こなたが立ち上がり野次馬を見た

「人が死んだんだよ、それなのになんでそんな酷い事言えるの？」

「こなた・・・」

かがみが心配そうに見つめる

「は、知ったこっちゃねぇや」

「そんな老人死んだからって何なんだよ」

「ガキがでしゃばんじゃねぇや」

野次馬達は吐き捨てるようにこなたに言った

「・・・・・」

「てめぇら・・・」

慶次が拳を握り締めてゆっくりと立ち上がる

その顔には、怒りが込められていた

「な、何だよ！」

「その怒りはその爺を斬った辻斬りに向けろよ」

「俺達は関係無いだろ！」

野次馬達の心無い言葉が今のこなたにはとても痛かった

こなたは、何を考えたのか頭のかつらを無造作に取った

そこから、青い綺麗な髪が現れる

「あ・・・青い髪だ！」

「お・・・おおお鬼の子じゃぁぁ」
「ひぇぇぇ・・・祟られるぞぉぉぉぉ」
「逃げろおおおおお」
野次馬達はこなたの青い髪を見た途端蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていった

「こなた・・・」
「いいよ、お爺ちゃんがこれ以上酷い事言われるより、私が鬼の子だって言われる方がマシだもん・・・」
そう言っていたこなたの肩は震えていた

＊＊＊

「すまねぇな、爺さん・・・こんなちんけな墓しか作れなくてよ」
慶次達は死んだ老人を運び、山奥の寺の脇に小さな墓を作って老人を埋めた
そして、両手を合わせて黙祷を捧げていた
「お爺ちゃん、天国でお婆ちゃんと仲良くね・・・」
こなたがそう呟きながら手を合わせていた
「お爺さん・・・短い間でしたが、お世話になりました・・・お爺さんの恩は決して・・・忘れません・・・ぅぅ・・」
みゆきが大粒の涙を流しながら墓に向かって言った

「私は・・・お爺さんの事を良く知らなかったけど・・・必ず辻斬りは捕まえてみせますから・・・安心して眠って下さいね」

かがみが決意を込めて老人の眠っている墓に祈った

「・・・・・」

つかさは黙って黙祷している

一通り終えた頃、慶次がスッと立ち上がる

「さぁ、帰るか・・・」

慶次がポンとこなたの肩を叩く

こなたもそれに反応してスッと立ち上がる

（許さない・・・人の命をこんなに簡単に奪う物も・・・奪おうとする人も・・・絶対に・・・）

こなたの目には、悲しみともう一つ・・・深い憎しみの心が宿っていた

＊＊＊

「犯人は分かったの？慶次兄ちゃん！」

老人の死から暫く経った日、こなたは慶次に聞いてきた

その後、慶次は独自に昨今起こっている辻斬りの常習犯を調べていた

「ああ、どうやら奉行所のドラ息子の仕業の様だ」

慶次が憎憎しげに言った

「奉行所の息子が・・・ですか？」

かがみの問いに慶次は首を振って答えた

「奴はつい最近手に入れた刀の試し斬りにと夜な夜な徘徊しては町を歩き回る人を手当たり次第に切り殺していたんだ」

「酷い・・・」

慶次の説明にみゆきが絶句する

他の皆も同じように苦い顔をしていた

「すぐに捕まえましょう！そしてお奉行に裁いて貰いましょう」

「ところがそれが無理なんだよ、かがみ」

慶次の突然の発言にかがみは「え？」と言葉を発した

「奴はこれまでに何回も捕まったらしいんだが、その度に無罪になっている・・・これの意味が分かるか？」

「ひょっとして、父のコネみたいな物ですか？」

「そうだ・・・あいつは親父と言う後ろ盾があるからすき放題に斬って回れるんだ・・・全く、反吐が出るぜ」

慶次がバツの悪い顔で言った

「でも、だからってこのままにはして置けませんよ！」

かがみが大声で言う

「当たり前だ！」

そこへ慶次が怒り混じりの顔で言う

「こうなったら俺達が直接あの野朗に制裁をかましてやるしかないな」

慶次が腕をボキボキと鳴らして言った

「で、でも慶次さん・・・相手は刀を持ってるんですよ・・・丸腰じゃやられちゃいますよ」

つかさがオロオロしながら言った

「心配するな、数内の刀じゃ俺は殺されないさ」

数内・・・それは所謂量産の刀
安売りの刀等を差す言葉である
この時代、名刀と呼ばれる程の刀はそれこそ目玉が飛び出る値段がする為、幾ら奉行所の息子でも手に入れる筈は無かったのだ
そして、それを慶次は被害者達の切り口から察したのである

「慶次兄ちゃん・・・私も行くよ」

「な、お前・・・」

突然のこなたの発言に慶次も驚いていた

「許せないよ・・・辻斬りも・・・刀も・・・人を傷つける物は全部・・・」

そう言ってこなたは目の前の刀を見た
その視線はとても憎悪に満ちていた目であった

（そうか・・・こいつが刀を嫌うのは・・・１０年前のあの事件が絡んでいたからか・・・）

慶次はふと腰に差した刀を見た
侍はこの時代刀を差すのは当たり前である
刀を差していないのは侍にあらず
そういわれるまでなのだ

「駄目だ！」

慶次はそう一言言った

「何で？」
「お前・・・人を殺せるか？」
「人を・・・殺す・・・」

その言葉を聞いた途端こなたは凍りついた

「相手は勿論お前を殺しに来る。だけどお前は刀が握れない・・・はっきり言って足手まといになる。だから連れていかん」
「で、でも・・・」
「言う事を聞け！！」

慶次の一言でこなたは黙り込んだ
今までこなたは慶次のこんな厳しい言葉を聞いた事が無かった
それに、今の慶次の顔は本気で怖かった
その顔は、何時もの優しい顔ではなく、地獄の鬼の様な形相に見えた

「辻斬りは俺が成敗する。お前は大人しくしていろ。良いな？」
「・・・・・うん」
慶次に言われ、こなたは小さく頷いた
慶次は小声で「すまん」と言ってこなたの頭を優しく撫でた後、部屋を出た

「こなた・・・」
かがみはこなたを見た
すっかりしょげてしまい、何時もの元気が欠片も見えなかった

「・・・・・だ」
「え？」

こなたが小さな声で何か言ったのを聞き、かがみは聞き返した
すると、

「だいっきらいだあああああ」
「うわ！」

途端に大声を出したのでかがみはびっくりして尻餅をついた

「慶次兄ちゃんめ～～～、あんな怖い顔で睨まれたら反論出来ないじゃんか～～こうなったら・・・尾行してやる～～～」
「はぁ！！あんた何言ってんの？」

突然何を言い出すかとかがみは心底驚いた
しかし、こなたは鼻にも掛けない

「こっそり後をつけて犯人を縛り上げてやるぅ」
こなたはぐっと拳を握り締めて言った
それを見てかがみははぁと溜息をついた
その横で、こなたはグフフと不気味に笑っていた

＊＊＊

夜・・・
慶次は一人前田家の門の外に居た
いや、正確にはもう一人居た

「すまないな、助右衛門。こんな役を頼んじまって」
「気にするな。これも町の治安を守る為さ」

そう言っている助右衛門は何故か、女装していた

「辻斬りも、こんなめんこい女には油断する筈だからな」

慶次はまじまじと見つめた

「あんまりじろじろ見るなよ・・・」

慶次に見られたせいか、助右衛門は改めて自分の今の姿を恥ずかしく思った

「ははは、悪い悪い、んじゃ・・・行くか」
「ああ・・・」

途端に二人の顔つきが変わった
それは、戦場に出る物の顔「いくさ人」の顔であった
その顔をしたまま、二人は夜の町に繰り出していった

「行ったみたいだね」

その後ろ姿を、門の影から見つめる姿が二つあった
こなたとかがみである

「本当に行くの？」

かがみが心配そうに聞く

「もちのろんだよ！あそこまで言われて黙って引き下がれますかって事ですよ」
（あそこまでって・・・そんなに酷い事慶次さんは言ってないけどなぁ・・・）

かがみは心の中で呟いた

「さ、急がないと見失っちゃうよ」
「あ、待ってよ！こなたぁ」

二人は、前の二人に気づかれないように慎重に後をつけた

＊＊＊

草木も眠る牛三つ時・・・・では無いが、それでも夜の町は不気味である
何故か、夜は月の光しか待ちを照らさないからだ

町の人は殆どが寝静まってしまった後であるし、その町の中を歩く人など有はしないからだ

夜の町を歩く・・・それは、時に刀を持った侍が何を血迷ったのか通りすがりの人を斬り付ける事、いわゆる「辻斬り」が横行しているからだ

その為、商人などは、夜は比較的に出歩かないようにしている

それが、この時代では普通であった

だが、そんな中一人の若い女性が夜道を一人歩いていた

「・・・・・」

女性は何も語らず、只黙々と歩いていた

そこへ、一人の若い侍が歩いてきた

「娘さん、こんな夜中にどうしたのです？」

「・・・・・」

侍の問いに、娘は答えなかった

いや、答える気は無かったのだ

（よし、あいつだ・・・みてろよ・・・）

その二人を影から慶次は見ていた

全ては、例の辻斬りをおびき寄せる為の囮である

今若い侍＝辻斬りと向かい合っている女性こそ、先ほど女装していた助右衛門その人であったのだ

「娘さん、何かおっしゃって下さいな」

侍は未だに助右衛門と気づかずに只女性を口説いていた
しかし、女性は首を振る振ると振るだけで一向に答えようとしない
その態度に侍も流石にいらついてきた

「おい、娘よ・・・もう一度聞くぞ、お前の名前は？」

侍は怒り混じりに聞く
しかし、女性の態度は変わらない

「ッ・・・・」

たまらなくなった侍は突如女性に向かって刃を抜いた

「フ・・・とうとう抜いたな、辻斬りめ！」

女性・・・いや、助右衛門はしめたとばかりに口を開いた

「き、貴様・・・男か？」
「その通り！」

そう言って助右衛門は被り物を取り払った

「流石は助右衛門だぜ！まんまと騙されやがって」

そこへ慶次が躍り出る

「き、貴様等・・・騙したな！」

侍が怒りＭＡＸに聞く

「はん、騙されるてめぇが悪いんだよ」
そんな侍に慶次があかんべぇをする
「貴様の度重なる殺傷の数々、最早許せぬ、この場で成敗する」
助右衛門が隠し持っていた刀を取り出し抜く
それに反応して侍も刀を構える
「止めときな、数打ちの刀じゃ俺達は倒せないぜ」
「数打ち？・・・ククク・・・馬鹿じゃないの」
「何？」
侍は不気味に笑う
「これはそんじょそこらのなまくらとは訳が違うぜぇ、こいつはなぁ・・・妖刀血吸丸さぁ！」
「な、血吸丸だと！」
助右衛門がその言葉を聞いて驚愕の顔を浮かべる

＊＊＊

「そ、そんな・・・まさか本当に妖刀が実在していたなんて・・・」
先ほどの会話を、物陰から聞いていたかがみが助右衛門と同じく驚愕の顔を浮かべる
「ねぇかがみん。妖刀血吸丸って・・・何？」

こなたが妖刀の名を聞いて首を傾げる

「ああ、妖刀血吸丸って言うのはねぇ」

妖刀・血吸丸

それは、呪われた刀である
かつて、一人の侍が居た
その侍は血に飢え、戦のある所必ず現れては、敵味方問わず切り殺していった
それも、どれがどの人の部分か分からない程バラバラに切り刻むという残忍な方法で・・・

やがて、その侍が戦で命を落とすも、その刀に侍の魂が宿り、以降その刀を持つ者は血に飢え、命ある限り人を切り殺していくという

と言い伝えられている

「・・・うう〜〜〜、自分で言って怖くなっちゃった」

かがみは思わず身震いした

「大丈夫かなぁ・・・慶次兄ちゃん達・・・」

こなたは心配そうに慶次達の戦いを見つめた

＊＊＊

「くっ、こいつ何て力だ！」

慶次が思い切り侍に向かって刀を振り下ろした

ガキィィィィィィィィン！

しかし、その刀は侍の刀によって防がれてしまう

「ハハハ、噂のかぶき者もこの程度か？弱すぎるぞ」

侍は狂ったように笑い出す

「くっ、慶次！こいつは最早正気じゃない」

「ああ、はなからその気だったが・・・こりゃマジでいかねぇとやばいな・・・」

慶次と助衛門は雄たけびを揚げて飛びかかる

「うおおおおお」

「はあああああ」

二人の刃がお互いに交互に襲い掛かる

カキイイイイイン！

キイイイイイイン！

しかし、そのことごとくを侍は軽く払いのける

「くっ、何て奴だ！」

「へ、自信失くすぜ、全くよぉ・・・」

二人はまだ払いのけられた際の衝撃が手に残りながらも刀を構える

「ハハハ、今夜は最高の獲物に出会えたぞぉ！いつもババァやジジィばかり斬っていたから退屈で仕方なかったが、今夜は違う！」

侍は勝ち誇ったかのように笑い出す

その時、

「グアァ！」

突如、侍が苦しみ出した

「な、何だ？」

助衛門が疑問に思う

それは慶次も同様であった

「ぐうううう！、な、何だ？カラダが・・・体が・・・痛い・・・」

”血を・・・吸わせろ・・・”

刀から声が響く

「ぐうううう！だ、だから言ってるだろうが・・・今からコイツラの血を・・・」

”吸いたい・・・お前の血を・・・吸いたい・・・”

「ひっ！！！」

刀の言葉に恐怖し、侍は血の気の引いた顔をした

「た、助けてくれえええええ」

侍は持っていた刀を投げ捨て、慶次達の方に駆け寄ってきた

しかし！

”逃がさん”

何と、投げ捨てた筈の刀が勝手に動き出し、侍に向かって一直線に飛んできたのだ

ズブリ！

「ゲボオォォォ！」

鈍い音と侍の断末魔の悲鳴が夜の街に響く

「な、何だ・・・」

慶次が目の前の出来事を見て目を丸くした

その目の前で侍は血を流してバタンと倒れた

”血だ・・・血だ・・・血だ血だ血だ血だ血だ血だ血だ血だ血だ”

刀が侍の血を吸い、刀身がみるみる赤く染まっていく

そして、血を吸い尽くした侍はミイラのようになっていき、最後には砂のように散ってしまった

「な、何だってんだ・・・こいつは・・・・」

慶次は眉を吊り上げる

”まだ・・・足りない・・・もっと・・・血を・・・・血を・・・・”

刀は赤いオーラを纏いながら宙を浮び、やがてその姿を変えた

刀は、みるみる内に、刀から醜い化け物の姿をした

頭は犬のような顔で、両腕は熊のように太い腕をし、足は鷹のように鋭くなっていた

「こ・・・こいつは・・・・」

「よ・・・妖怪・・・・」

慶次と助衛門は目の前に現れた妖怪に驚いていた

「な、何よ・・・あれ・・・・」

かがみは妖怪の姿を見て不覚にも腰を抜かしてしまった

「け、慶次兄ちゃん！」

思わずこなたは飛び出していく

「ちょ、こなた！待って！」

かがみが止めようと起き上がるが、腰を抜かしてしまったせいか、思うように歩けないでいた

「慶次兄ちゃん！」

「こ、こなた！」

慶次は居るはずもないこなたを見て驚きの声を上げる

「ば、馬鹿野朗！何で来たんだ！」

「・・・御免・・・なさい・・・」

こなたは思わず慶次に謝った

「慶次！来るぞ！」

「！！！」

慶次は振り向いた

妖怪は慶次に狙いを定め飛びかかってきた

「くっ！」

慶次は咄嗟に刀を横に構えて守りの姿勢を取る

バキィィィィィィィィィン！

妖怪は慶次の刀を真ん中からへし折ってしまった

そして、妖怪の拳が慶次の腹に命中する

「ガハァッ！」

慶次は苦悶の声をあげて地面に落ちる

口から血が吹き出る

「け、慶次兄ちゃん！」

その慶次にこなたが近づく
”お・・・お前・・・”
妖怪はこなたを見て呟く
「え？・・・」
こなたは妖怪の方を見る
「に、逃げろ・・・こなた・・」
慶次が擦れた声で言う
酷く苦しそうだった
恐らく骨がやられたのだろう・・・早く手当てしなければ危険だ
「で、でも・・・」
こなたは慶次を見た
その顔はとても苦しそうである
そんな慶次を見捨てて逃げる等、こなたには無理であった
その時・・・
”グアアアアアアア”
「え？きゃあああ！」
妖怪はその大きな手でこなたを掴み上げる

ミシミシと骨の軋む音がする
とても強い力で締め上げられているのだ

「こなた！」

そのこなたを救おうと助衛門が切りかかる
しかし、

”フン！”

助衛門の一刀を片腕で払いのけ、更にその助衛門を殴り飛ばした

「ガハァ！」

殴り飛ばされた助衛門は家の壁に叩きつけられ、そのまま気を失ってしまった

「す・・・助衛門・・・さん・・・・ぐううう」

妖怪の手の力が増す
両手で絞めているのだ

”死ね・・・死ね・・・死ね・・・”

妖怪が不気味に笑う
その時

「どりゃあああああああ」

突如雄たけびを上げてかがみが向かって来た

かがみは果敢に妖怪の腕に斬りかかる

「か・・・かが・・・みん・・・」

「待ってなさい！すぐに助けるから」

そう言ってかがみは思い切り刀を振り下ろした

しかし、

バキィィィィィン

激しい音を立ててかがみの刀が折れてしまったのだ

「う、うそぉ・・・」

かがみが折れた刀を見て恐怖する

”女だ・・・”

妖怪はかがみに向かってギロリと大きな目を見せる

「う・・・あ・・・」

かがみは妖怪の目を見て完全に恐怖してしまい、動けなくなってしまった

やはり、そこは女の子である

どんなに男勝りに剣技を磨いても妖怪が相手では身が竦んでしまう物である

”女・・・肉・・・食わせろ・・・”

妖怪がかがみにそう呟く
その口から異臭と血で汚れた唾液が滴る
「あ・・・・ああ・・・・・」
かがみはそのままぐったりと気を失い倒れてしまった
”肉・・・肉・・・食う・・・グオオオオオオ”
そんなかがみに向かって妖怪の牙が襲い掛かる
「・・・ろ・・・・」
”???”
何か聞こえたのか妖怪がこなたの方を向く
「・・めろ・・・・」
”な、何だ・・・”
「やめろおおおおおおおおおお」
そう叫んでこなたは自身を掴んでいる手を握った
そして、その手を思い切り握りつぶした
”ぎゃあああああああああああああああああああ”
突然の出来事に思わず掴んでいた手を離す
こなたはそのまま大地に降り立ち、妖怪を睨みつける
そして、着けていたかつらがこなたの放つ気に反応してボウと燃えてしまった
そして、そこから青い髪が現れる

”や・・・・やはり・・・・お、鬼の子・・・・”
妖怪は改めてこなたが鬼の子だと確信し、恐怖に凍りついた
「許さない・・・お前だけは・・・絶対に・・・」
こなたは先ほどまで自分を掴んでいた腕を逆に掴み、思い切り引っ張った
すると、妖怪の腕はまるで木の枝を折るかの様に簡単に引きちぎれてしまった
”グワアアアアアアアアアアアアアア！”
妖怪の悲痛の叫びが町に木霊する
こなたは千切った腕をポイと投げ捨てると今度は両手で妖怪の頭を掴んだ
ミシミシと音を立てて妖怪の顔が歪んでいく
”や・・・やめろ・・・やめてくれ！・・・死にたくない・・・死にたくないいいいいいいいいいいい！”
「お前のせいで・・・お前のせいで・・・お爺ちゃんや・・・お婆ちゃんが死んだんだ・・・許せるもんかあああああああああ！」
叫びと共に渾身の力を腕に込める
すると妖怪の顔はこなたの腕の中でグシャグシャになってしまい、残った頭は数歩後ろに下がった後そのまま倒れてしまった
「こ・・・こなた・・・」

折れた箇所を押さえながらヨロヨロと慶次が歩み寄った
そんな慶次を尻目にこなたは自分の手を見た
手には妖怪の血がビッシリとこびりついていた

「・・・慶次兄ちゃん・・・」

こなたはゆっくりと振り返りながら呟いた
目が虚ろになっている
余程ショックだったのだろう
そんなこなたの頭に慶次がそっと手を添える

「怖かったか？」
「やっぱり・・・私・・・刃物は・・・嫌い・・・・だよ・・・・」

そう言ってこなたは俯いた
肩が僅かに震える
慶次に今出来る事と言えば、そんなこなたの頭を摩って慰める事位であった

＊＊＊

翌日、奉行所の息子が謎の辻斬りに遭ったと言う報せが町中に響き渡った
奉行所は血眼になって下手人を探したが、結局犯人は見つからず、事件は迷宮入りとなってしまった
しかし、民衆としては日頃辻斬りを行うドラ息子が居なくなったと言う事なのでホッとしていた
それから暫くして

「この店・・・やっぱり売り飛ばす事になったんだね」
「はい、もう店の品も無いですから」

こなた達は老人の経営していた雑貨屋の前に来ていた
その店にはもう看板が無かった
剥がされたのだ
今後はこの店は別の店主が店を開く際に使うと言う事らしく、その見納めに来ていたのだ

「爺さん・・・あんたの店は別の人が使ってくれるよ・・・少し寂しいが先にあの世で待っててくれよ」

慶次が煙管を片手に天を仰いで呟いていた
空は一面快晴であった
不思議と快晴の空を見ると気分が良くなってきた

「うっし！そんじゃこれからどっかで飯でも食うか！」
「やふー！お腹すいた～」

慶次の提案にこなたは諸手を上げて喜ぶ
それを横で見ていたかがみが溜息をついて呆れる

「はぁ・・・相変わらず元気ねぇ」
「ムフフ～、さぁて、今日は何処で食べようかな～」

満面の笑みを浮べながらこなたは言った
ふと、かがみはある事を思い出した

「そう言えばみゆきはどうするの？あのお爺さんの家でお世話にな

ってたらしいけど」
「うん、みゆきさんは今後うちでお世話になる事になったよ・・・
何でも軍師の才能があるんだって」
「ま、また凄い才能ねぇ（汗」

苦笑いと浮かべつつも、みゆきの身の振り先が決まった事にホッと安堵するかがみであった

第3話　終

第４話　知り合いは忍者に医者！？（前書き）

今回はあの二人が登場！
果たしてこの世界では何をやっているのだろうか？

第４話　知り合いは忍者に医者！？

第４話「知り合いは忍者に医者！？」

現在時刻は朝の４時
戦国の世でこの時間と言えばまぁ普通の町民なら起きている時間だが、平和になった世の武将達は一部を除き殆どが寝ているのだ
そして、その一部と言うと・・・

「ムフフ～、毎朝の悪戯は欠かせないよねぇ♪」

そう、こなたである
こなたは最近起きるのが遅くなった武将達に毎朝この時間に起きて悪戯をするのだ
戦国の世にはネットやゲーム等現代の娯楽は殆どない為こなたの娯楽と言えば専ら悪戯であった
そして、今日もとある武将の元へ悪戯しようと静かに襖（ふすま）を開けて中に入る

「さぁて、今回はどんな悪戯をしようかな～、顔に落書きしようかな～、それとも褌に天狗様の絵でも描こうかな～」

と思いながら武将の所に近づく
だが、こなたが武将の顔を見た途端顔を顰める事になった
・・・何故なら

「な・・・す・・・既に悪戯されてる！！！」

そう、目の前の武将には既に顔に猫のような落書きをされており最

早悪戯のしようが無かったのであった

「ぬぬ～、ならば褌に天狗の落書きを！」

そうなれば急がないと思い武将の袴を脱がす

だが、其処には既に河童の落書きが書かれていた

「ぬぉっ！こ・・・こっちにも！・・・一体誰が・・・」

こなたは何者かに先を越された事に非常に落胆してその場に膝をついた

＊＊＊

「って訳なんだよかがみん～～（涙」

その後こなたはすぐにかがみの部屋に来ていたのだった

起き抜けだったかがみは乱れた髪のままこなたの愚痴を聞いていた

とりあえず今かがみが言いたい事はたった一つ

「とりあえず・・・出てけ」

一旦こなたを外に出して身支度を整える

そして仕度を整えてこなたを部屋に招き入れる

「んで、悪戯しようと思ったら何者かによって先を越されたと・・・

言う訳なの？」

「そうなんだよかがみん～～～。折角の私の朝の楽しみを一体誰が

横取りしたんだか・・・」
握り拳を作りながら怒りの表情でこなたは言う
そんなこなたを見てかがみはニヤリとする
「つまり・・・結論からするとお前今日も悪戯しようとしたって訳なのね」
「うん、そだよ」
「あっそぉ・・・んじゃぁ」
かがみはそう呟いた後、
ゴンッ！
本日一発目のかがみの鉄拳制裁がこなたの脳天に炸裂した
因みに今回のは結構痛かったらしい

＊＊＊

「ってな訳なんだよ！酷くない？みゆきさん！」
結局かがみには鉄拳制裁を食らっただけだったので仕方なく今度はみゆきの元へ向かった
因みにみゆきは今勉強中であった為部屋中本だらけであった
しかも殆ど兵法書とか文学書ばかりでこなたがまず見ない本ばかりであった
「そ、それは災難でしたねぇ（汗」

とりあえずそう言っておいた
それに気を良くしたのかこなたが更に続ける
「毎朝の悪戯は私の唯一の楽しみなのに！それを誰かに取られるなんて楽しみにしてたゲームとかを先に取られるような物なんだよぉ！分かるみゆきさん！この私の気持ちが！」

こなたが熱弁する
その熱弁をみゆきが汗を流しながら聞いていた

（こなたさん・・・ゲームって一体何ですか？）

この時代にゲームは無い為みゆきにはさっぱりであった
そんなみゆきを気にせずこなたは更に続ける
結局2時間はこなたの熱弁をみゆきは聞く羽目になってしまった
みゆきにして見れば災難でもあった

＊＊＊

「っと言う訳なんだよ慶次兄ちゃん！酷いと思わない！」
「へぇ、そうだったのかぁ」

今度はこなたは慶次の元へ来ていた
そしてまた今朝の事を話していた

「どうでも良いけどよぉ・・・今は少し黙っててくれないか？」

何時に無く素っ気無い態度の慶次
と言うのも慶次は今助右衛門と将棋の勝負をしていたのであった
そして助右衛門の手にあった飛車が玉を指す

「王手！」
「ゲッ！助右衛門！それはちょとたんまで！」
「駄目だ！これで5回目だぞ慶次」

大弱りする慶次を見て助右衛門はニヤリとする
それを見て大きな体が徐々に小さくなっていく慶次
はっきり言って今こなたは蚊帳の外状態であった

「むむぅ～、慶次兄ちゃんは今お取り込み中かぁ・・・」

仕方なくこなたはその場を後にした
因みにその後慶次は助右衛門に散々負けまくったと言う

＊＊＊

「へぇ、そうなんだぁ」

結局その後こなたはつかさの所に来ていた
つかさは今非番なので暇を持て余していた所にこなたが来たのだ
つかさはこなたの言ってる意味が半分以上理解出来ておらずとりあえず相槌だけは打っていた

「そうなんだよ！酷くない？私のささやかな喜びを無残にも奪うなんて・・・許せん！犯人は絶対に見つけて体中落書きまみれにしち

ゃるぅ（怒」
（こ、こなちゃんが怖い・・・）
つかさは真っ青になってこなたを見ていた
するとこなたはある事に気づいた

「そうだ！ねぇつかさ・・・最近巷で流行ってる「ねずみ小僧」って知ってる？」
「あ、聞いた事ある！何か悪徳商人とか悪いお代官様とか町の皆を虐めるような人達からだけ物を奪ってそれを貧しい人達に配るって言う・・・えぇと・・・何て言ったっけ？」
「「義賊」だね」
「そう、それ！」

つかさはこなたの言った言葉に反応した
因みに今この町でもねずみ小僧の噂は知れ渡っており民衆にとっては正にヒーローと呼べる者でもあった
その噂は既に前田城内にも耳に入っており、中には「ねずみ小僧を引っ捕らえよう」と息巻く者達も居た程だ
だが、未だに捕まった話は聞いていない

「そのねずみ小僧について町で聞き込みしようかなぁって思ってさ」
「え？町で」
「うん、きっと私のささやかな楽しみを奪ったのもきっとそのねずみ小僧かも知れないし」
「え？そうなの？」
「まぁ確信は無いけどね・・・とりあえず暇だしまた町に繰り出そうかなぁって思ってるんだ！良かったら一緒に行こう！」
「うん、行って見たい！」

こなたの誘いにつかさは即ＯＫを出した
そんな訳で二人は城下町にやってきた
因みにこなたはちゃんとカツラを被っている
町では数日前に「辻斬り事件」があったにも関わらず賑やかを取り戻していた

「そう言えば、こなちゃんはあのお店には行ってないの？」
「うん、あの店には行ってないね」

つかさの問いにこなたは答える
それに「どうして？」と尋ねる

「最近変わったあの店主がさ、お前が来ると今度はこっちまで不幸になるから来るなって言うんだよねぇ・・・だからあの店には行ってないよ」
「こなちゃん可愛そう（涙」

つかさは涙目になる
すると、目の前に見覚えのある人影が見えた

「おんやぁ？あれってかがみんじゃないの？」
「本当だぁ！ゆきちゃんも一緒だよぉ」

目の前に居るのは腰の刀を挿した紫のツインテールと桜色の長髪をした少女達であった
こなたはそんな二人を見て何やら良からぬ事を思いついたのかニヤリとする
そして人ごみや物陰に隠れながらこっそりと近づく
そして、

「ヤフ～」

と言ってかがみの背中にダイブしようとした正にその時

「柊～～」

「うわっ！な、何！」

突如前方から何者かがかがみに抱きついた

その為こなたは出遅れてしまいそのまま地面に激突した（頭から）

その間、目の前では

「柊～、久しぶりだな～元気だったか～？」

と言ってかがみの頬に自分の頬を擦り寄らせる

「ちょ、ちょっと日下部！離れてよ！人が見てるんだからね！」

かがみは周りの視線を気にしながら必死に日下部と呼ばれた少女を引き剥がす

剥がされた少女は何故か剥れた

頬を膨らませて如何にも不満有り気な顔をしている

「何だよぉ～久しぶりの再会じゃねぇかよ～良いじゃんかよ～スキンシップを取ったってさぁ～」

「お前のはやり過ぎなんじゃ！全く」

かがみが溜息を吐いていると

「かがみいいいいいいいいいいいいん！（叫」

「うわっ！こ、こなたぁ？何であんたが此処に？」

後ろには滝のように涙を流したこなたがかがみの名前を大声で呼んでいた

「かがみん！何その子は？ひょっとしてかがみんのこれ？」

と言って小指を上げる

「はぁ？」

「私との関係は遊びだったのねぇ！酷いよぉかがみ～ん！」

「何を言うとるか己は！（怒」

ガスッ

「あうっ！」

余りに唐突に変な事を口走った為にかがみの空手チョップが炸裂したそれを食らったこなたは頭に大きなタンコブを作って倒れる

「なぁ柊・・・このちっこいの誰だ？」

日下部が目の前のこなたを指差す

それがどうにもカンに障ったのか不機嫌な顔になる

「ちょっと！ちっこいのって何さぁ！私には泉こなたって言う立派な名前があるんだよ！」

「へぇ、そうなんだ。私は日下部みさおってんだぜ！宜しくなちびっ子」

「だからちびっ子じゃない！このみさきち！」

「ヴァッ！みさきちだとぉ！私の名前はみさおだってさっき言った

ばっかりじゃねぇかぁ！」
「へへん、みさきちが私の事をちびっ子呼ばわりするからだよ～だ！」
思い切り舌を出してあかんべーをするこなた
それを見てみさおの額に血管が浮ぶ
「こんのぉ～、ちびっ子の癖に生意気だぞ～」
「何お～、そっちこそみさきちの癖に生意気だぞ～」
お互いに睨みあって激しい火花が舞い散る
それを見ていたかがみが盛大に溜息を吐く
「ったく・・・そう言えば日下部！あんたが来たって事は峰岸も来てるの？」
「んあぁ！あやのならそっちで・・・」
みさおが指差した先では蜜柑色の髪をした少女が老婆の足を見ていた
「ちょっと痛いですけど我慢して下さいね」
と言って懐から細い針を取り出す
「えい！」
そして狙いを定めて老婆の膝に刺す
チクッとした痛みがしたがそれは一瞬であった
そしてゆっくりと針を老婆の足から外す
「どうですか？動きますか？」

「おぉ！ついさっきまで動かなかった足がまるで嘘みたいじゃ！」
動かなかった足をブラブラ振って老婆は喜んでいた
「良かったですね。御婆ちゃん」
「いやぁ、あんたは良い医者だねぇ～、今度店を開いたらひいきにさせて貰うよぉ、それじゃぁ」
「はい、お大事に」

去っていく老婆に峰岸は軽く会釈して見送る
そしてふとみさお達の方を振り向く
そしてかがみに気づく

「あ！柊ちゃん！元気だった？」
「相変わらずみたいね、峰岸も」

軽く笑ってかがみと峰岸は互いに再会を喜び合った

「かがみさんと峰岸さんはお知り合いなのですか？」

横に居たみゆきが聞く

「あ、始めまして！私は峰岸あやのと言います。どうぞ宜しく」
「高良みゆきと申します。ご丁寧なご挨拶痛み入ります」

と言ってお互いに会釈し合う

「何かさぁ、みさきちより出来が良いよねぇ」
「ヴァッ！お前にだけは言われたくねぇぞちびっ子」
「何おう！」

「いい加減にせんか！」

ゴンゴン！

「ひでぶ！」

「ヴァッ！」

喧嘩両成敗の如くかがみの鉄拳が二人の頭に降り注ぐ

二人はとても痛そうに頭を抱える

「どんだけ～」

つかさはその横で目を点にして呟いていた

＊＊＊

広場で騒ぎまくった６人はその後近くにあった茶店で団子を食べながらお茶を啜って話に花を咲かせていた

「すると柊はあの前田家に仕えてるんだな」

「まぁね、でも最近は専らこいつのお目付け役なんだけどね」

そう言ってかがみは横で団子を食べるこなたを見る

こなたはかがみの視線に気づき首を傾げる

「へぇ、良いなぁちびっ子は～、柊に世話してもらえるなんてよぉ」

「フフン、良いでしょう～」
みさおが羨ましそうな目をしていたのでこなたは自慢げに鼻を鳴らす
それにかがみが「威張るな」と言いながらチョップを頭に当てる
「でも良かったわね柊ちゃん、あの前田家に仕えられたんだから」
その横ではあやのがかがみに笑顔でそう言う
それにかがみが「有難う」と言って返す
「そう言えば何でかがみんは城下町に来てたの？」
「みゆきの付き添いで来たのよ」
そう言ってかがみはみゆきを見る
みゆきは横で静かにお茶を啜ってホッと一息つく
そして皆の方を見て微笑む
「今お城にある本は全て読んでしまいましたので町に新しい兵法書を求めて本屋を探してたんです」
「でも、結局収穫は一冊だけ・・・そんで帰ろうと思ったらあんた等に会ったって訳よ」
「へ～そうなんだ～」
つかさは納得した
「ってか、お城にあった本全部読んだの！凄くない？みゆきさん！私だって一冊読むのしんどいのに」
「えっと・・・本を呼んでますと夢中になってしまいまして・・・それで呼んでいく内にお城にあった本を全部呼んでしまったんです」
「すっげぇなぁあんた」

みさおは関心したのかそう呟く

「そう言えばかがみさんと日下部さん達はお知り合いなんですね」
「昔住んでた所が近かったのよ・・・日下部は甲賀忍者の頭領の娘で、自身も凄腕の忍者なのよ」
「ま、兄貴や親父にはまだまだ及ばねぇけどよ」
「ご家族全員が忍者なのですねぇ」

みゆきは驚く

「それで、峰岸は医者の卵なのよ！」
「そ、そんな・・・只家が医者の家計なので医学書等を読んでいく内に覚えちゃっただけですよ」
「だからってそれで内科から外科・・・はたまた針治療までこなせるのはあんた位でしょうが」

かがみがやんわりと突っ込む

「ねぇねぇ、外科って何？」
「要するにお腹を開いて手で直接治療する物ですよ」
「は、腹を切るの！！死んじゃうよ」

こなたは驚く
確かに何故この時代に外科が発達しなかったのか
その理由が腹を裂くと言う理由からだ
当時腹を裂くと言う事は切腹の言われでもあり縁起の良い物では無かった
その為多くの人は外科手術を嫌っている為日本の外科の進歩は外国に比べて遅れた原因の一つでもあったのだ

「ですが・・・家の両親が外科治療の本を揃えていましたので呼んでいる内に憶えてしまったんです」
「へ～、凄いんだねぇあやのちゃんって」

つかさは目を輝かせて見ていた
そんなつかさの視線を感じて頬を赤らめる
そんな時、茶店の隣で人の集まりを見つけた

「何でしょう？あれは」
「行って見ようよ！」

皆はとりあえず代金を払って人ごみの中を見た
どうやら皆何かの看板を見ているようだった
だが、人ごみのせいで肝心の看板が見えない

「むむぅ・・・見えないなぁ（汗」
「これじゃ見えないわねぇ」

こなた達は今賑わう野次馬達の最後尾に居た為看板が見えなかったのだ
だが、やがて賑わう野次馬客も去っていきようやく看板が見えた
其処にはこう書いてあった

「え～っと、なになに・・・『噂のねずみ小僧からの予告状！今夜前田家の財宝を頂戴すると言う不届き千万な文が届き候』って書いてあるよ」
「そ、それってかなりやばいじゃないの！」

看板の内容を読んでかがみが驚愕した

だが、こなた達は平然としている

「なぁなぁ、前田家の財宝って何だ？」
「利家の叔父ちゃんの髷じゃないの？」
「おのれらは少しは危機感を持てえええええええええええええええ！」

こなたとみさおに向かって血管を浮べながらかがみが怒鳴った

「か、かがみさん！すぐにお城に戻りましょう！」
「そ、そうね！ほらこなた！早く戻るわよ」
「え～、まだ何も買ってないのに～」
「今すぐこの場で拳骨１００発分を贈ってやろうか？（怒怒怒」
「今すぐ行きます！」

かがみが拳に息を吹きかけてるのを見て青ざめてこなたは言った

「なぁあやのぉ、あたしらも行こうぜ」
「え？でも良いのかしら？私達部外者なのに」
「この際人手が欲しいわ！利家様には私が上手く言いくるめるから二人も来て頂戴！」

みさおとあやのの手を取ってかがみが頼み込む
それに二人はうんと頷いた

＊＊＊

城下町から戻ってきたこなた達はすぐに利家の居る部屋に呼ばれた
其処には前田家全武将達の姿があった
勿論慶次の姿もだ

「今回皆に召集を掛けたのは他でもない、この様な文が届いた事だ！」

そう言って利家は懐から例の手紙を取り出した
それを家老が開き読み上げる
内容は先ほど城下町で読んだのとほぼ同じであった

「実に不届き千万！その様な輩はとっつかまえて打ち首にしてしまいましょうぞ！」

武将の1人が怒り混じりにそう言う
それに他の武将達も「そうだそうだ！」と言う

「しっかしおじきよぉ。家にそなお宝あったかぁ？」

慶次が耳を穿りながら聞く
すると利家は手をパンパンと叩く
それを合図に小姓達が一斉に奥の間から一組の鎧を持ってきた
かなり年期の入った黒光りしていた美しい鎧であった

「うわぁ・・・古臭い鎧だねぇ・・・あれがお宝なのぉ？」

こなたは鼻で笑いながら見ていた
だが、そんな事を聞いた武将達は青ざめた

「こ、こなたよ！あれはかの『織田信長』が着ていた由緒正しき鎧だぞ！あれに値打ちを付けるとしたら城一個分にもなるぞ！」

武将の1人が説明する
するとこなたの目が輝く

「すっごいじゃん！すぐにそれを質屋に売っぱらって皆で美味しい物食べようよぉ！」
「ばっかもおおおおおおおおおおん！んな事したらお主ら全員切腹もんじゃぞおおおおおおおおおおおお！」

利家が顔を赤くして怒鳴った
その隣に居たかがみが頭を抱えていた

「あんた・・・普通そんな事を言う筈無いでしょうが」
「え？だって誰も使わないんなら邪魔じゃない！だったら売った方が良いんじゃない？」
「ダハハハハ！こなたの言う通りだな！使わないで埃を被ってる位なら質屋に売った方が良いな」
「け、慶次殿まで！そんな事をしたら関白様の怒りに触れる事になりますよ！」

かがみが青ざめた顔で言う
するとこなたが首を傾げた

「関白様？・・・誰それ」

その一言で慶次以外の全武将がずっこけた
その後ろに居たつかさも分かっていないらしく、みゆきは苦笑いを浮かべており、みさおは欠伸をしていて、あやのはオロオロしている

「あ・・・あんた・・・『豊臣秀吉』様を知らないの？」
「誰それ？憶え難そうな名前だねぇ」
「・・・今この国を治めているお方の事よ・・・あんたも前田家の武将ならそれ位覚えて為さいよ！」
「え～、めんどい～」

こなたが口を膨らませて言う
それにかがみが鉄拳を食らわせてやろうと思ったが止めた
これ以上何を言っても多分無駄だと思ったのだろう
其処で話を戻す為に利家が少し大きめに咳払いをする

「と、とにかく！今夜は全員寝ずの体制で警備に当たるのだ！其処の客人達も頼むぞ」
「うぃ～っす」
「わ、分かりました」

利家の言葉にみさおが面倒臭そうに言って、あやのが緊張しながら言った
他の武将達は自分がその盗人を捕まえようと息巻いていたが、慶次は何処か乗り気じゃなかった

（めんどくせぇなぁ・・・たかが鎧じゃねぇか）

慶次は物言わぬ鎧を見て不満げになった

＊＊＊

時は経ち、今は満月が美しい夜
城内では武将から兵士、更には小姓までもが借り出されて２４時間体制で見張りをしていた
そんな中、城中を見下ろす人影があった

（へへ、流石前田家だ・・・警備は万全ってね・・・だけど、これじゃおいらを出し抜くなんて無理だぜぃ）

黒い服一式に身を包み顔には黒い頭巾を被った背丈からして少年と思わしき者がそう呟いていた

一方、広間では鎧一式を囲むようにこなた達が陣取っていた

「ふわ～～あぁ、眠いな～」
「あんたねぇ！少しは緊張感を持ちなさいよ！こんな時に盗人が入ってきたらどうするのよ！」

欠伸をするこなたにかがみが指摘する
その横では

「あ～～～あぁ、退屈だなぁ～、早く盗人来ねぇかな～」

煙管をブラブラさせながら慶次が呟いた

「け、慶次さんまで・・・全く」

そんな慶次に対してかがみは溜息をつく
その横ではみゆきが町で買った新しい兵法書を読んでいた

「ほら、こなたもみゆきを見習って何か本でも読んで置きなさいよ！」
「え～、だって本を読んでると眠くなるんだもん」
「あんたねぇ（汗」

これ以上言っても無駄だろうと思ってかがみは言うのを止めた
言い過ぎて自分が疲れたらしょうがないからだ
すると、突如天井の一角がガタガタ音を立てた

「む！曲者！」
「お！来たか！」

かがみはスラリと刀を抜き放ち、慶次は興味身心な顔になった
そして天井の一角が開き中から出てきたのは・・・

「柊いいいいいいいい！」
「んのわあああああああああああああああ！」

何と忍者服を着たみさおであった
紺色の服であった
そして天井からまっさかさまに落ちてきてそのままかがみに抱きついた
突然の出来事にかがみは対応出来ずにこける

「驚いたか？柊！お前を驚かす為に必死に考えたんだぜぇ！」
「良いから離れろぉ！」

ベタベタするみさおにかがみが鬱陶しそうに離そうとする

「ごらぁみさきち！私のかがみんから離れろおおおおお！」
こなたがみさおに向かって飛び蹴りを放つ
「ヴァッ！」
後頭部に蹴りがヒットしてそのまま吹っ飛ぶ
「な、何するんだこのちびっ子！」
目に涙を浮かべてみさおがこなたを睨む
「うっさいみさきち！かがみんは私の嫁なんだからベタベタひっつくのは許さん！」
「何おう！柊は私の嫁だってヴァ！」
「違う！かがみんは私の嫁だよ！」
「違う！柊は私の嫁だってヴァ！」
「「う～～～～～～～～～～～！」」
こなたとみさおが互いに睨みあう
視線の間で激しい火花を散らす
「おうおう、かがみ～、お前モテモテだなぁ」
「そんなんじゃありません！ってか、慶次さんも茶化さないで下さい！」
慶次が面白そうなのでからかうが、かがみはスルーした
みゆきはそんな一行には目も暮れず本に没頭する
すると、

「お姉ちゃん、こなちゃん、夜食持ってきたよぉ」
「少し一息入れましょう」

つかさとあやのが軽食を持ってやってきた

「つかさ！前にも言ったけど城内でお姉ちゃんは止めなさいって何度も言ってるでしょう！」
「え～、かがみん固い～」
「そうだぜぇ柊ぃ～、もっと肩の力を抜けよ～」
「お前等は抜きすぎなんじゃ！」

こなたとみさおに対しかがみが額に青筋を浮かべて怒鳴る

「と・・・とにかく今は何かお腹に入れておこうよ」
「そうですよ、城内の皆様にも配って置きましたから」
「相変わらず気配りが効くなぁあやのは・・・それなら家の兄貴を落とせるんじゃねぇの？」
「み、みさちゃん！そう言う事は此処で言わないでよ！／／／」

ニヤニヤしながら言うみさおにあやのは頬を赤らめて手を振って言う
それを見てこなたもニヤニヤする
慶次も同様にニヤニヤしていた
とりあえず皆は一斉に持ってこられたおにぎりに手を伸ばした
塩加減が丁度良く空きっ腹には嬉しい物であった

「いやぁ、流石つかさの握った握り飯は美味いなぁ」
「えへへ・・・この漬物はあやのちゃんが持ってきてくれたんだよぉ」
「家で漬けてるのを少しだけ持ってきたんです」
「な・・・何これ？」

こなたは漬物を掴んで聞いた
大根なのは分かっていたが、色が黄色がかっていた
「それはね、「沢庵(たくあん)」って言うのよ、とっても美味しいから食べてみて」
「へ～」
あやのに言われてとりあえず少し齧ってみる
すると、
「おぉ！こりゃ美味しい！マジでうみゃ～だよ！」
「本当だな！こりゃうめぇぜ！」
皆は美味い美味いと言いながらおにぎりとたくあんを食べていた
それからまた暫くは時間が経った
やがて満月が真上に来るまでの時間になった頃になる
流石にその時間になると外周りをしていた武将達も皆やる気が無くなっていた
しかし、この中では未だに火花を散らす激闘が展開していた
「何度言ったら分かるかなぁ！かがみんは私の嫁だって言ってるじゃん！」
「そっちこそわかんねぇかなぁ？柊は私の嫁だってヴァ！」
そう、こなたとみさおがかがみを取り合って喧々囂々の言い合いをしていたのだ
流石にこの時間まで元気なのはこの二人位であり、かがみも少し眠そうになり、みゆきも本を読み終わってしまいウトウトしており、慶次も退屈そうにしており、つかさに居たっては本寝をかましてい

た、あやのもかなりキツそうだった
そんな中でこのハイテンションな二人なのだ
流石にかがみの我慢も限界に達した

「ええい！五月蝿いから外でやれぃ！」

と言って二人をたたき出す

「むむぅ・・・みさきちのせいでおん出されちゃったじゃん！」
「違ぇよ！ちびっ子のせいだよぉ！」

お互いに罪を擦り付け合って再び睨みあう
すると、

「よっと、結構警備の手薄なとこってあるんだよねぇ」

何と、如何にも盗人と言えるような服をした少年が降りてきた
しかも間の悪い事にこなたとみさおにバッチリ見られている
それを見た二人が

「「あ！」」

と声を揃えた
それを聞いて

「へ？」

と振り向く、すると其処には少年を凝視するこなたとみさおが居た

（やっべ～、見つかっちまったよ！ねずみ小僧一生の不覚！どうす

る？どうやって巻く？）

脳内で必死にあれこれ考えていると

「ねぇ君」

「え？な、何？」

「私とこの忍者・・・どっちがかがみんの嫁に相応しいと思う？」

「へ？へ？」

「勿論この私だよなぁ・・・こんなちびっ子じゃ柊の嫁なんて務まる筈ねぇし」

「何おう！そう言うみさきちだって無理じゃん！」

そう言い合ってまた睨みあう

そんな光景を見ていたねずみ小僧は困っていた

（え～～～、お宅ら僕があの有名な「ねずみ小僧」だって知らないの？つっても顔を見られたのは今回が初めてだけどさぁ・・・しかも誰だよかがみんって？）

そう、ねずみ小僧からしてみればいきなり出会った赤の他人に訳の分からないネタを振られた物なのだ

どう答えれば良いか返答に困る

すると、突如二人が視線をねずみ小僧に向ける

「「どっちが良いと思う！！」」

「え・・・え～っと・・・さいなら！」

これ以上関わってられないと判断したねずみ小僧はそそくさと逃げに入った

「ヴァッ！答えずに逃げたな！」
「絶対に答えを聞くぞぉ！」
それを追って二人が飛び上がって屋根に乗る
一方で、屋根の上を走っていたねずみ小僧
「さ、流石に此処まで来れば追って来ない『待てええええええ！』え？」
ねずみ小僧は嫌な予感がして振り返った
其処には物凄い形相でねずみ小僧を追いかけるこなたとみさおがあった
「ええええええええええええええええええ！ちょ、何で追ってくるのおおおおおおおおおおお！」
「まだ答えを聞いてねえってヴぁよおおおおおおおおお！」
「答えを聞くまでは逃さないよおおおおおおおおおおお！」
「し、知らないよおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
ねずみ小僧は涙目になった逃げ出し、それを二人が追いかける
屋根の上をピョンピョンと飛びながら逃げるねずみ小僧
だが、途中で瓦を踏み外してしまいバランスを崩す
「やばっ！」
後悔したが後の祭りであった
このまま下へまっさかさまになると思い目を瞑る
だが、

ガシッ

「え？」

突如何かに捕まれる感覚を感じた

上を見ると、其処には自分の腕を掴んでいたこなたとみさおが居た

「せ・・・セーフ・・・」

「ギリギリ間に合ったってヴァ」

ホッと溜息をつくこなたとみさお

「ま・・・負けたよ・・・」

完全敗北を宣言するねずみ小僧に二人は頭に？マークを浮かべる

＊＊＊

「えええええええええええええええええええ！君ねずみ小僧だったのおおおおおおおおおおおお！」

「知らなかったってヴァあああああああああああああああああああ！」

その後ねずみ小僧は謁見の間に連れてこられた

例にもよって縄でギュウギュウに縛られている

「ほほう、こやつがあのねずみ小僧か・・・」
利家が頭巾を被っていた少年を見て呟いた
ねずみ小僧はその場に胡坐をかいて不貞腐れた顔をしていた
「ふてぶてしい奴よ！早速打ち首にしてくれるわ！」
武将の１人が腰に挿していた刀を抜き放ち切りかかろうとした
「ちょいとたんま！」
だが、それをこなたの足払いで防がれる
武将は「ムギュッ」と声を上げながら床に鼻をぶつける
「まだこんな子供を切るなんて酷すぎない？」
「そうだなぁ・・・私もそれには賛成だな」
其処は意見の合うこなたとみさおである
「まぁ良い、ところで貴様が狙っていたのはこの鎧なのか？」
そう言って利家が由緒正しき鎧を見せる
すると
「え～、そんなかび臭い鎧なんか要らないよ！おいらが欲しかったのは其処の桃色の髪をした姉ちゃんが読んでた本だよ！」
そう言って顎でみゆきを指差す
「え？私の本ですか？」

「その本おいらも読みたかったんだ！だけど本屋に行ったら売り切れって言われてさ！そんで最後に買った客を聞いたらあんただって分かったんだ！」
「それで昨夜忍び込んだって言うの？・・・呆れたわねぇ」
流石にかがみもこれ以上何を言えば良いのか言葉が見つからなかった
つまり、ねずみ小僧の目的は鎧では無く本であったのだ
するとみゆきは
「宜しければ差し上げますよ」
「え？良いの？」
「はい、丁度読み終わったところでしたし」
ニッコリと笑ってみゆきが本を差し出す
すると後ろで慶次がねずみ小僧の縄を解く
「良かったな坊主、本が手に入ってよぉ」
「ああ、昨日は大変な目にあったけど楽しかったよ」
本を片手に少年は意気揚々と部屋を駆け出す
ふと振り返った
「姉ちゃん達！頑張って「かがみ」って言う人の嫁になれよ！」
そう言い残して少年は飛び去って行った
それを聞いたかがみは顔を真っ赤にする
「こなた！日下部！それどういう事？」
「え・・・えぇと・・・昨日あのねずみ小僧に・・・どっちがかがみんの嫁に相応しいかって聞いたんだよねぇ」

「た、多分それじゃねぇかなぁ・・・なぁちびっ子・・・」

二人は真っ青になってそう言った

すると、かがみは懐から何時持ってきたのか木刀を取り出して構える

「お前等！一辺頭冷やせえええええええええええええええええええ

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！」」

鬼の形相になったかがみが二人を追い回す

その光景を前田家全武将は笑いながら見ていた

＊＊＊

一方、ねずみ小僧は前田家から少し離れた木の上に座っていた

その視線の先には、前田家の城が見えた

「あれが・・・俺の姉ちゃんか・・・確かに母ちゃんに似てるな・・・」

そう言って少年は頭巾を取った

其処から現れたのは・・・・綺麗な青い髪であった

「さてと、さっさと頭領に報せに行くかなっと」

そう言い残して少年はフッと姿を消した
その際に舞い散る葉っぱが風に乗って何処までも飛んでいった

余談だが、みさおとあやのはこの一件のお陰で前田家に仕えさせて
貰える事になったと言う

第４話　終

第４話　知り合いは忍者に医者！？（後書き）

ねずみ小僧の髪も青かった
そして彼の言う「頭領」とは一体？

第1章　第5話　「青い髪」（前書き）

今回は少し短いです

第1章　第5話　「青い髪」

第1章第5話「青い髪」

その日、ねずみ小僧はとある部屋に来ていた
周りは自然に出来た洞窟内を改装したような空間であり、蝋燭の明かりだけが部屋を照らしていた
そして、ねずみ小僧の前に1人の大柄の男が座っていた
その男も青い髪をしていた
後ろに延びた長い髪を髪結びで束ねており、簡素な服を着ていた
その男がねずみ小僧を見て言う
「それは本当なのか？ゆうた」
男がねずみ小僧の事を『ゆうた』と呼んだ
それにゆうたが頷いた
「はい、間違いありません・・・頭領の妹にそっくりでした」
「青い髪だったのか？」
「はい、おいらと同じ青い髪でした」
それを聞いた頭領は頭を抱えた
「なんてこった・・・まさか人間共に飼われているとは・・・きっとあの青い髪をネタにされて飯の種にでもされているのだろう」
頭領は顔を手で覆って悲しげに呟く
「ですけど頭領！人間もそんなに悪い奴等ばかりじゃなかったっすよ！特にあの前田慶次なんて気さくで話しやすい奴だったし・・・」
ゆうたは説明するが
「お前は騙されているんだ！人間共の為にどれ程の同胞達が奴等の凶刃に倒れたと思ってるんだ！」
頭領はいきり立った顔でゆうたを睨む
その顔を見てゆうたは思わず青ざめる
「・・・すまん・・・お前には苦労をかけっぱなしだな。ゆうた」

「水臭い事言わないでよ叔父さん・・・っとと、頭領！おいらは別に気にしてなんか居ないよ！それに死んだと思ってた姉ちゃんにも会えたんだし」
「・・・そうだな・・・」
頭領はそう言うと少し疲れた顔をした
「すまんが・・・少し1人にしてくれ・・・少し考え事をしたい」
「あいよ・・・また何かあったら呼んでくれよ」
そう言い残してゆうたは風の如く姿を消した
それを確認して頭領は深く溜息を吐く
「・・・・かなた・・・お前はあんな人間共と一緒になって本当に幸せだったのか？俺には分からないよ・・・何であんな人間を好きになるんだ・・・俺達は『鬼』なんだぞ！」
頭領は1人悲しげに呟いていた

＊＊＊

『やはりこの子は鬼の子だ』
『この子が居ては我が国が滅びてしまう』
『呪われた子め！』
『鬼の子め！』
多くの黒い影がそう言い張る
『お前さえ生まれて来なければ』
『呪われた子め！』
『青い髪は呪いの証拠だ！』
『化け物め！』
口々にそう言い張る黒い影達

そんな中、小さな子供は涙を流していた
その子は青い髪をしていた
目元を腕で押さえて肩を震わせている
やがて、少女はその場で蹲ってしまった
すると、其処へ黒い髪をした少年が歩み寄った
『何で泣いてるの？』
「・・・皆が私の事を化け物って言うの・・・」
『どうして？』
「この青い髪のせいなの・・・こんな髪のせいで私・・・鬼の子だって何時も虐められるの・・・」
少女はそう言ってまた蹲ってしまった
だが、少年はそんな少女の髪をそっと触れる
『そうかなぁ？僕はこの青い髪は好きだよ。凄く綺麗だし』
「君は・・・私の髪を見て何とも思わないの？」
少女はそっと少年を見上げる
少年はそんな少女を笑って見た
『だって綺麗だよ、君の髪・・・』
「本当？」
『うん！』
涙ぐむ少女に少年は頷く
すると少女の顔はパァッと明るくなる
そして、少年はそっと少女に手を伸ばす
『捕まって』
「うん」
少女は自分に向けて伸ばされた少年の手を掴む
とても温かい手であった
少女は少年の手を掴んで立ち上がった
気がつくと、少女の涙は何時の間にか止まっていた
「有難うね・・・私・・・『かなた』って言うんだ・・・君、誰？」
『僕は『泉　そうじろう』って言うんだ。宜しくね』

お互いに名前を言い合って二人は笑いあった
すると、周りの風景がパッと明るくなる

＊＊＊

「・・・変な夢」
こなたは自分が見た夢を見て呟いた
一体夢に出てきた少年と少女は誰だったのだろうか
何処かで見た気がしたのだが思い出せないでいた
「う～～ん、朝から奇妙な夢を見たもんだなぁ・・・どうせならもっと楽しい夢を見たかったなぁ」
朝から妙な夢を見た為微妙な気分になるもとりあえず起きる事にした
そう、毎朝の日課で城内に居る武将達に悪戯をしようと思ったのだ
「さぁて、今日は誰の元へ悪戯しに行こうかなぁ～」
胸を躍らせながら部屋を出ようとするこなた
だが、その時ふと天井に目をやる
そして側に置いてあった槍（何故かは突っ込まないでくれ）を取り出して天井に突き刺す
「うわっ！危なっ！」
天井から声がした
それは聞き覚えのある声であった
すると天井から人影が落ちて来た
それを見てこなたが呟く
「また君かぃ？みさきち」
「フフフ、私の気配を読むとは流石だなちびっ子」
「朝から失礼な忍者だねぇ・・・私はこなただって何度言ったら分

かるんだい？」
「そっちこそ私はみさおであってみさきちじゃないんだってヴァ！」
朝からみさおとこなたは互いに睨み合う
激しい火花が両者の目から放たれる
そして、懐から筆を取り出す
筆の先には墨がベッタリと付いていた
「今日はみさきちが悪戯のターゲットだよぉ」
「奇遇だなぁ、私も今日はお前をターゲットにしてたんだよ！」
「「覚悟！」」
お互いに飛び上がって筆を振るう

＊＊＊

「っで、朝からお互いに顔に落書きした結果がそれって事ね？」
「「・・・・・」」
その後、二人はかがみの部屋に来ていた
二人とも下手な落書きが顔中に塗りたくられている
それを見てかがみはハァと溜息を吐いていた
「全く、あんた等はまるで犬猿の仲ね」
「犬猿の仲？何それ」
かがみの言葉にこなたは首を傾げる
それを見てみさおがププっと微笑む
「何だ？ちびっ子、お前知らねぇの？犬と猿が盆踊りをしたからそう言われたんだってヴァ」
「全然違う！犬猿の仲ってのはお互い仲が悪いって意味よ！」
「へぇ、そうなんだ！ところでどっちが犬と猿？」

こなたがみさおを見て尋ねる
「そんなの決まってるだろう！私が犬だってヴァ！」
「ぬぁにぃ！犬は私だよぉ！」
「ぬぬっ！ちびっ子が犬だってぇ！そんなの似合う訳ねぇだろう！」
「何おう！」
お互いに再び睨みあう
それを見てかがみは頭を抱える
「とりあえず、お前等他所でやれ！」
かがみはこれ以上自分の部屋で騒がれるのは迷惑だと思いとりあえず二人を追い出した
追い出された二人は仕方なく
「じゃぁこの場で決着をつけようかみさきち」
「望む所だちびっ子！」
と言ってその場で再び筆を構える
そしてジリジリと距離を詰めていく
すると
「アハハハハ！相変わらず変な事やってるね二人共」
ふと声がした
それは塀の方であった
振り向くと、其処には紺色の服を着て頭巾を被った少年が居た
「あ、ねずみ小僧！」
「ヤッホー！元気かい？」
ねずみ小僧は子供っぽく手を振る
それを見てしまったせいか二人は完全に戦意を失ってしまった
その為懐に筆を仕舞う
「んで、今日は何の用だよ？また何か盗みに来たのか？」
「嫌ぁ、そんなんじゃ無いよ」
みさおの問いにねずみ小僧はかぶりを振る
「ねぇ、其処の青い髪の子さぁ・・・名前何て言うの？」
「え？何？ナンパ？悪いけど年下には興味ないんだよね」

こなたはとぼけた顔で言う
だが、それを聞いてねずみ小僧は肩を上げる
「別に僕も興味ないから・・・それより早く名前教えてよ」
「むぅ・・・失礼な子供だねぇ・・・ま、良いけどさ、私は泉こなたって言うんだ」
「因みに私は日下部みさおって言うんだ」
何故かついでにみさおも自己紹介をした
ねずみ小僧は別にみさおには聞いてないのに何で自己紹介したのかと首を傾げた
「んじゃぁさぁ、君の名前を教えてよ」
「僕は『泉ゆうた』って言うんだよ」
ねずみ小僧改めゆうたは名乗った
それを聞いてこなたは気づく
「あれ？私と同じ苗字だねぇ、何で？」
「これさ」
そう言ってゆうたは頭巾を外した
其処から現れたのは何とこなたと同じ青い髪であった
それを見て二人は目を見開く
「うぞぉ！私と同じ色の髪をしてるのぉ！」
「そりゃそうだよ・・・何せおいらとあんたは同じ母ちゃんの腹から生まれたんだからさ」
「え？」
ゆうたの一言にこなたの目の色が変わった
「って事は・・・ちびっ子とお前は姉弟なのか？」
「そう言う事になるよ」
みさおの問いにゆうたは答えた
そして、ゆうたはこなたを見る
「姉ちゃん・・・姉ちゃんは母ちゃんと父ちゃんを憶えてる？」
「憶えてないよ・・・だって私生まれてすぐに捨てられたもん」
「だよね・・・憶えてないよね」

それを聞いたゆうたは少し寂しそうな顔をする
それを見てこなたが首を傾げる
「実はさ・・・おいら達の母ちゃんも同じ青い髪だったんだ」
ゆうたは語った
「母ちゃんはさ、鬼の里で生まれて兄貴と二人で暮らしてたんだ。だけど母ちゃんは凄く外の世界に憧れて、ある日勝手に外に出ちゃったんだ。当時青い髪は不吉の象徴だったから降りた途端母ちゃんは町の奴等に虐められたんだよ・・・でも、それを父ちゃんが助けてくれたんだ」
ゆうたは語った
「それがきっかけで母ちゃんは父ちゃんに惚れちゃったみたいなんだよねぇ、んで父ちゃんも母ちゃんに惚れたみたいでさ、結局兄貴と3日3晩口論の末やっと母ちゃんと夫婦になれたって事なのさ」
「そうなんだ・・・お父さんも中々やるねぇ」
こなたは少し鼻が高い感じになった
だが、其処でゆうたの顔が重く沈んだ
「だけど、当時父ちゃんが収めていた国では青い髪の母ちゃんを嫁に貰った父ちゃんが許せない奴が居たらしくてさ・・・最初に生まれた子供を見せしめに城から遠くへ捨てたみたいなんだ。そんでそれを知った二人は城を捨てて何処かへ行っちまったって訳」
「・・・・・」
こなたは何も言えなかった
自分が前田家の子供では無い事は薄々気づいていた
だが、自分の両親がそんな目にあっていたとは初耳であったのだ
「そんでおいらは気がついたら母ちゃんの故郷である鬼の里に住んでるのさ」
其処でゆうたは話を区切った
そしてこなたを見る
「姉ちゃん、そんな勝手な人間と一緒に居て楽しいの？」
「え？」

「人間なんて皆身勝手な奴等だよ。自分の欲望の為に周りを平気で巻き込むし、弱い奴等は虐めるし、すぐ死ぬし・・・そんな奴等と一緒に居たってつまんないだけだよ」
ゆうたは言う
その言葉にこなたは黙って聞いていた
「それより、おいら達と一緒に鬼の里に行こうよ・・・兄貴もきっと待ってるからさ」
「やだよ」
「え？」
ゆうたの誘いをこなたは一言の元に蹴った
その後も話し続ける
「私はそんな人間が好きなんだもん！どんなに身勝手で意地悪でも、その中には優しい心があるんだよ！だから私は人間が大好きなんだよ！」
こなたは目を輝かせて言う
そんなこなたの顔を見てゆうたは肩を上げる
「やれやれ・・・本当に姉ちゃんは頑固だなぁ・・・今回はこのまま帰るけど・・・でも、考えておいてよ・・・姉ちゃんだってその青い髪で結構悲しい思いをしてるんだしさ」
そう言った後、ゆうたは風のように消え去ってしまった
そんなゆうたを見送った後、こなたは少し暗い顔をしていた
「ちびっ子」
みさおは少し同情の篭った目でこなたを見た

＊＊＊

慶次は壁を背にその話を聞いていた
腕を組んで壁に背を預けて空を眺めている
その視線は何処か寂しそうであった
「そろそろ・・・あいつも巣立ちの頃なのかもなぁ」
そう、慶次は呟いた

第1章　第5話　「青い髪」（後書き）

次回もお楽しみに

第1章　最終話　それから時は経ち・・・（前書き）

過去の話しはこれで終りです

第1章　最終話　それから時は経ち・・・

あやのは1人部屋で医学書に目を通していた
彼女は医者の卵であり、両親は揃って名医である
その為幼い頃から医学書には触れてきたので自然と医学が体に染み付いていたのだ
元々両親に憧れて医者を目指していたあやのはその後親友のみさおと共に各地を旅歩き、その中で様々な知識や経験を得て今に至るのだ
そんなあやのに、今日も騒がしい親友が駆け込んできた
「あ～～や～～の～～（涙」
「あら？どうしたの？みさちゃん」
顔中落書きまみれになったみさおがあやのの部屋を訪ねてきた
因みに今の服装は忍び装束である
「聞いてくれよあやのぉ！」
誰の断りも無くズカズカと上がりこんでその場に座り込んでみさおは語り出す
あやのはやれやれと言った顔で医学書を閉じて話を聞く
「今日よぉ、またちびっ子の部屋に忍び込んで悪戯しようと思ったらちびっ子の奴待ち伏せしてやがったんだぜぇ！お陰でこの有様だってヴァ！」
「ふぅん・・・でもそれってみさちゃんの自業自得じゃないの？」
「ヴァ！あやのが冷てぇ・・・」
予想通りの返答にみさおが滝のように涙を流す
そして、こちらでは

「って事があったんだよ！かがみん！」
「・・・・・」
此処はかがみの居る部屋
其処のすぐ側の庭でかがみは朝の日課である素振りをしていた

そんなかがみの元へ顔中らくがきをつけたこなたがやってきたのだ
そして先ほどのみさおとほぼ同じ内容をかがみに話していたのだ
「あんたねぇ・・・毎度そんな事で私に言いに来るなっての！」
そう言ってこなたの頭に竹刀をぶつける
「アウチィッ！」
声を上げて頭を抑えるこなた
それを見てはぁと溜息をつくかがみ
こんな感じの光景が既に2年は続いていた
こなた達は既に１７歳になっていたのだ
と言ってもあんまり背丈は変わってない
特にこなたに至っては１０歳当たりから成長が止まったかのような
背丈しか無かった
だが、彼女の悪戯は日増しに凄まじさを増し、ある時は起きた途端
頭から墨汁の雨を浴びたり
またある時は部屋を出た途端地下２０ｍ位下まで掘られた落とし穴
に落とされたり
酷い時は足を縛って逆さ吊りにされたり等、
かなりえげつない悪戯をしでかしていた
だが、その度にかがみの鉄拳制裁が加わりそれ以上酷い悪戯は幸い
しなくなっていた

・・・そして、時は最初に話した頃に戻る

＊＊＊

慶次とこなたは二人して原っぱで寝転んでいた

「色々あったなぁ」
「そうだねぇ・・・悲しい事もあったけど・・・楽しい事もあったね」
「ああ、そうだな」
こなたの言葉に慶次は頷いた
そしてそのまま二人は青空を見る
空は晴天で雲がゆっくりと流れていく
こなたは青空が大好きだった
辛い時、悲しい時はあの青空を見るとスッキリするのだ
だからこなたは青い空が大好きであった
それは慶次も同じである
「あぁ・・・鳥になりてぇなぁ」
「ん？」
ふと、慶次は呟いた
「鳥になりゃぁよぉ、何処でも自由に飛びまわれるじゃねぇか・・・俺にはあの城は狭すぎるぜ」
「そうだねぇ・・・私も最近悪戯に飽きてきちゃったよ」
こなたがあくび混じりに呟く
それを聞いて慶次は少し暗い顔をした
飽きたと言う事はもしかしたらこなたはこの家を出て行く事になるのだろう
そうなると少し寂しい物だな
と内心そう思っていた自分にふと笑みがこぼれる慶次
（やれやれ、なんだかんだ言って・・・こいつももう17か・・・世間じゃもう誰かの嫁になっててても可笑しくねぇ年頃だなぁ）
27歳の慶次はそう思った
「だが、どんな人生を歩もうとも・・・お前は俺の大事な妹に変わりはねぇからな」
「ん？何か言った？慶次兄ちゃん？」
「あん？あれだ・・・腹減ったなぁ・・・ってさ」

慶次が腹を摩りながら言う
するとこなたの腹からも空腹の報せの音が鳴り響く
「そう言えばおなかすいたねぇ・・・そろそろ帰ろうか」
「そうだな」
そう言って慶次とこなたは原っぱを後にして来た道を戻っていった

余談だが、第1話から見ている人は分かると思うが・・・

戻ってきた後、慶次とこなたは利家に滅茶苦茶怒られたらしい

第1章　終

第1章　最終話　それから時は経ち・・・（後書き）

第1章はこれでお仕舞いです

お知らせ

突然ですが、「らき☆すた　ｉｎ　戦国時代」を第１章を終了したのを機に一時休刊させて頂きます
と言うのもリアルの世界で忙しい上に最近ネタが浮ばないのでこのまま待たせても読者の方々に申し訳ないと思い思い切ってこうする事にいたしました

しかしながら、自分もこのまま終らせるつもりは無く、今書いてる小説達がひと段落ついたら今度は第２章を書いて行こうと思っております
誠に勝手な事で申し訳ありませんが何卒ご理解をお願いいたします
それでは皆様、また何時かお会いしましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9082n/

らき☆すた　in　戦国時代　第１章

2011年1月4日17時44分発行